

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

1987年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1988年3月

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

1987年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1988年3月

序

靈峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山禪定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、眞の地域社会の発展へつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

立山町教育委員会

教育長 坂井市郎

例　　言

- 1 本書は、立山町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第3年度（1987年度）の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成しこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力しておこなった。
- 4 本文は、宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、森秀典、押川恵子、春日眞実、田中道子、安英樹（富山大学人文学部考古学専攻学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 参考文献は本文末に一括し、通し番号を付して示した。本文のルビ数字は、この参考文献番号である。
- 6 遺物番号は図版ごとに通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し、実測図と写真的番号を統一している。
- 7 本書には、分布調査以前に採集・発掘された未報告の資料を出来る限り収録した。その区別は本文中に示し、遺物の散布状態として示す数値からは除いている。
- 8 編集は秋山進午、宇野隆夫と森秀典が協力しておこなった。
- 9 本書の作成にあたっては、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏をはじめとする方々から多くの貴重な御教示をうけた。また石器の石材は、富山大学教養部教授藤井昭二氏に鑑定していただいた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 立山町の地勢と自然環境	2
4 1987年度調査地区の地勢と地区割	6
第2章 分布調査の成果	7
1 遺跡と採集遺物	7
(1) 塚越Ⅰ遺跡	7
(2) 塚越古墳	8
(3) 塚越Ⅱ遺跡	9
(4) 塚越Ⅲ遺跡	9
(5) 鉢ノ木Ⅰ遺跡	9
(6) 鉢ノ木Ⅱ遺跡	10
(7) 曾我遺跡	10
(8) 利田横枕遺跡	11
(9) 利田堀田遺跡	12
(10) 利田高見遺跡	13
(11) 総曲輪遺跡	13
(12) 五郎丸遺跡	13
(13) 横沢Ⅰ遺跡	14
(14) 横沢Ⅱ遺跡	15
(15) 日水遺跡	15
(16) 二ツ塚遺跡	16
(17) 二ツ塚経塚	17
(18) 二ツ塚畠田遺跡	17
(19) 浦田石田遺跡	18
(20) 大藪塚	18
(21) 浦田馬渡し遺跡	18
(22) 浦田西反遺跡	18
(23) 上野Ⅰ遺跡	19
(24) 上野Ⅱ遺跡	19
(25) 上野Ⅲ遺跡	19
(26) 日置遺跡	19
(27) 前田経塚	20
(28) 上末窯	20
(29) その他	24
2 遺物の散布状態	25
(1) 縄文時代遺物の散布状態	25
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態	25
(3) 古代遺物の散布状態	25
(4) 中世遺物の散布状態	31
(5) 近世遺物の散布状態	31
(6) 遺物の散布について	31
第3章 おわりに	33
参考文献	35

図版目次

関連頁

図版 1	Ⅲ地区航空写真(1).....	立山町教育委員会提供.....	2 ~ 6
図版 2	Ⅲ地区航空写真(2).....	立山町教育委員会提供.....	2 ~ 6
図版 3	塚越古墳墳丘写真.....	宇野撮影.....	8 ~ 9
図版 4	塚越古墳墳丘測量図.....	押川製図.....	8 ~ 9
図版 5	遺物実測図(1).....	春日製図.....	7 ~ 14
図版 6	遺物実測図(2).....	安製図.....	14 ~ 20
図版 7	遺物実測図(3).....	田中製図.....	20 ~ 22
図版 8	遺物実測図(4).....	田中製図.....	21 ~ 22
図版 9	遺物実測図(5).....	田中製図.....	22 ~ 23
図版10	遺物写真(1).....	宇野・森・春日撮影.....	7 ~ 14
図版11	遺物写真(2).....	宇野・森・安 摄影.....	14 ~ 20
図版12	遺物写真(3).....	宇野・森・田中撮影.....	20 ~ 22
図版13	遺物写真(4).....	宇野・森・田中撮影.....	21 ~ 22
図版14	遺物写真(5).....	宇野・森・田中撮影.....	22 ~ 23
図版15	Ⅲ地区的遺跡と遺物採集地点.....	宇野・森作成.....	25 ~ 32
図版16	I 地区の遺跡と遺物採集地点.....	宇野・森作成.....	20 ~ 23

插図目次

第1図	立山町の気候・植物帯の垂直変化	『立山町史』から	2
第2図	立山町西部の地勢	宇野・森作成	3
第3図	Ⅲ地区図	宇野作成	4
第4図	Ⅲ地区的地区割	宇野作成	5
第5図	Ⅲ地区縄文時代遺物の散布状態	宇野作成	26
第6図	Ⅲ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態	宇野作成	27
第7図	Ⅲ地区古代遺物の散布状態	宇野作成	28
第8図	Ⅲ地区中世遺物の散布状態	宇野作成	29
第9図	Ⅲ地区近世遺物の散布状態	宇野作成	30

表目次

第1表	立山町上末窯採集須恵器の器種構成比	田中作成	24
-----	-------------------	------	----

第1章 はじめに

1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連続と人びとの営みが続いている。

従って遺跡も多数存在しており、1972年（昭和47年）の「富山県遺跡地図」においては63個所の遺跡が登録されている。そして、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことになった。

1985年（昭和60年）3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査團を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することになった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、五個年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

また調査の実施にあたっては、町域を8地区に区分し、I～V地区を当面の対象地域として初年度は第I地区、第2年度は第II地区、第3年度の本年は第III地区について調査をおこなった（第2図）。

現地調査は、4月3日～4月9日・13日までと10月2日～10月6日の間、主として土・日・祝祭日に3回に分けて計11日間、延130人余の参加を得て実施した。

立山町埋蔵文化財分布調査団

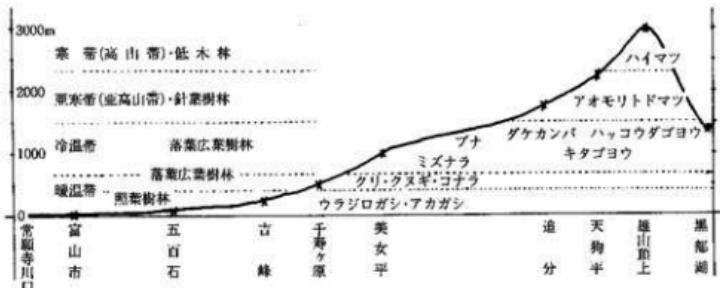
団長 板井 市郎 立山町教育委員会教育長
 課問 岡崎 邦一 元立山町史編纂主任
 安田 良栄 立山町文化財保護審議委員
 調査団 秋山 進午 富山大学人文学部教授（調査主任）
 宇野 隆夫 富山大学人文学部助教授（調査副主任）
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事
 調査補助員 大場 梨之、沢辺 利明、酒井 聰子、田島富恵美、辻 札子、中浦 千里、小田木治太郎、
 針木 恵子、山谷 典子、押川 恵子、春日 真実、境 洋子、品川 水美、高村 幸江、
 田中 道子、安 英樹、長谷川健一、金木和香子、桑名 秀徳、清水 孝之、山本 慎子
 (以上、富山大学人文学部考古学研究室学生)

事務局 松井 哲男 立山町教育委員会社会教育課長
 関上 寛 立山町教育委員会社会教育課長代理
 路治 令子 立山町教育委員会社会教育課主任
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

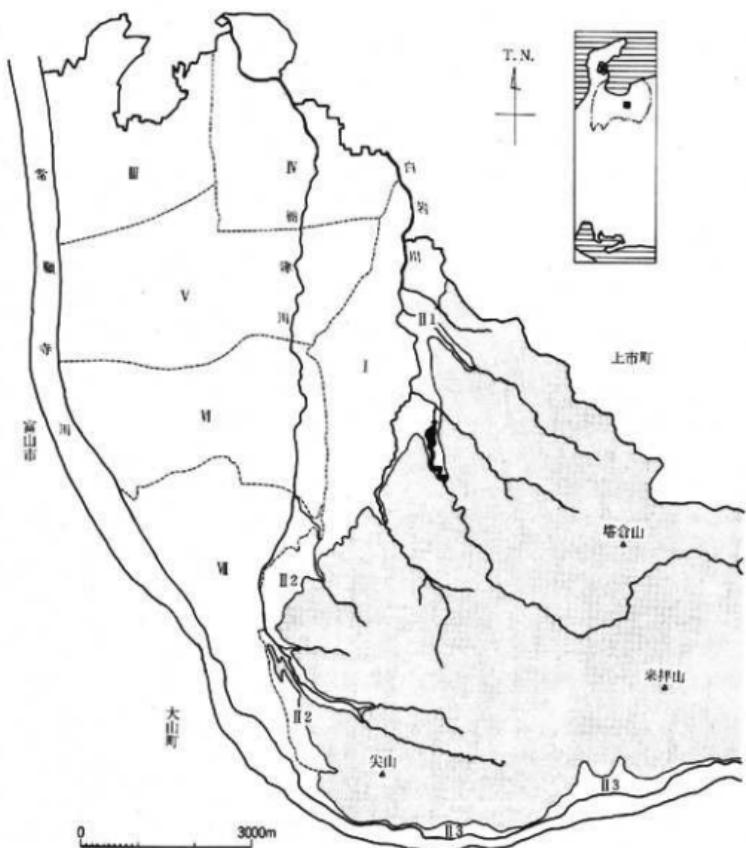
3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く伸びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308km²を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川によって形成された三角洲（デルタ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に伸び、扇頂



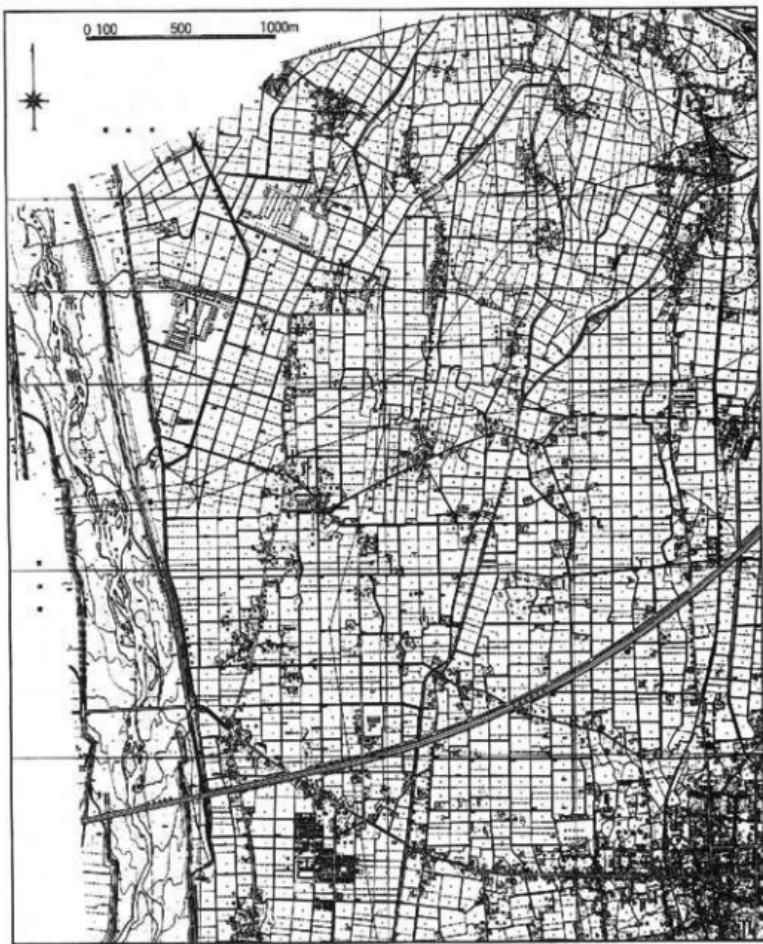
第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化(『立山町史』から)



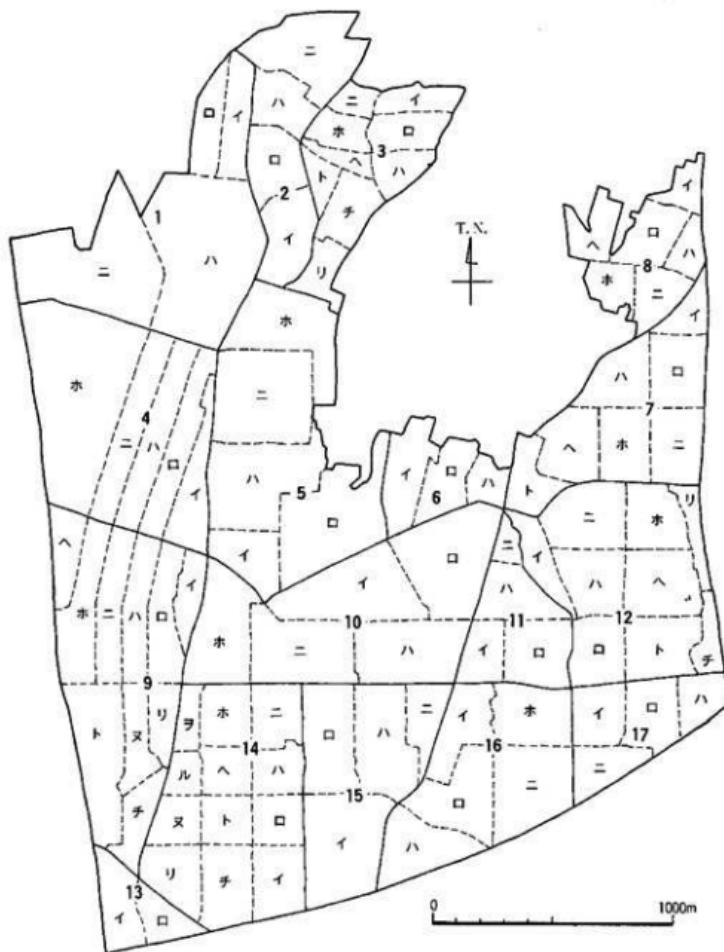
第2図 立山町西部の地勢(Ⅲ地区が1987年度調査区。縮尺1/100,000)

部の岩峠寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる(第2図)。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3,000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の圓谷(カール)や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴う複雑な動物相も存在する(第1図)。



第3図 Ⅲ地区図(縮尺 1/30,000)



第4図 III地区の地区割(縮尺1/23,000)

4 1987年度調査地区の地勢と地区割

今回の調査地区は、立山町の西北部、利田地区及び新川地区の西部である。

この地区的地形は、常願寺川と柄津川が形成した扇状地の扇央部近くから扇端部に至る部分と、デルタの湧水地帯とから成っている。また微地形についてみると、調査地区南半は扇央付近から扇端にかけての部分であり、北半はデルタ地帯に、扇状地の微高地が突出する形となっている。この突出部は間に谷（現在の舟橋村）を挟み、北にのびる2つの半島状微高地を形成している。

従来の知見ではこのような地形の中で、最も早くから人びとの生活の場となったのは東側（新川地区）微高地上であり、縄文時代中期にはすでに二ツ塚遺跡のような大集落が営まれたことが知られていた。次いで西側（利田地区）微高地上に塚越古墳が築かれ、さらに利田横枕遺跡に代表される古代集落が営まれている。そしてその後、扇端部から扇央付近にかけての地域に、日水遺跡に代表される中世集落が営まれた。

以上のように、従来の知見でも、時代が下るに従って人びとの生活の場が、デルタ湧水地帯から扇端部さらに扇央付近へと広がっていった事が知られていた。しかしながら、確認された遺跡の数は段丘上に比して少なく、ほ場整備が早くから進行したこともある、その破壊・消滅が心配されていた。

現在は、調査地区のほとんど全てが水田等の耕作地、又は宅地となっている。また当地区は、宅地造成等の開発行為の多い地区の一つでもある。そのため当地区は分布調査を特に必要とする地区的1つであった。

調査は、全体を地形・水路・道路等によって17地区に大別し、さらに小地区に細別して実施した。

（森秀典）

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) ^{つかこし}塚越Ⅰ遺跡（図版15の48）立山町塚越

常願寺川扇状地の末端の微高地上、現在の塚越集落の東側に広がる遺跡である。標高は約13mを測り、規模は南北450m以上、東西400m以上に及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、遺物の分布状況は南側に特に多く集中している。今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器5片、弥生～古墳時代の変形土器11片、壺形土器6片を含む土器（弥生土器・土師器）362片、古代の土師器変形土器3片、器種不明2片、須恵器壺3片、杯A・B身、杯B蓋各1片、器種不明3片（計14片）、中世の珠洲壺3片、すり鉢1片、土師器皿11片（計15片）、近世の唐津、伊万里系染付碗、京焼系楓各1片、越中瀬戸壺3片、皿4片、楓2片、香炉1片（計15片）、中世ないし近世の越前焼2片、時期不明の土師器151片、総計557片を採集した。弥生～古墳時代のものが特に多い。これらのうち17点を図示している（図版5の1～17）。

図版5の1～6は有段口縁の変形土器である。1は復原口径16cm前後を測る。直線的に外傾する比較的長い口縁部を持ち、頸部の屈曲はゆるやかである。口縁部外面には5条の擬凹線を施し、口縁部及び頸部内外面には横方向の撫で調整をおこなう。また外面には多量の煤が付着する。弥生時代後期末月影式のものと考える。

2は直線的に外傾する口縁部を持ち、口縁先端は丸く收める。口縁部・頸部内外面ともに横方向の撫で調整をおこない、口縁部内面に指頭圧痕を残す。弥生時代後期末月影式前後のものであろう。

3は外反ぎみに伸びる口縁部を持つ。口縁部下端に棱を持たせることにより有段口縁状に見せている。口縁部外面には浅い凹線を2条施し、口縁部内面、頸部内外面には横方向の撫で調整をおこなう。弥生時代後期前半のものと考える。

4は復原口径13cm前後を測る。口縁部は外反ぎみに伸び、先端は丸く收める。口縁部下端から頸部にかけての屈曲は弱く、器肉は比較的厚く均等である。調整は口縁部と頸部の内外面に横方向の撫で調整をおこなう。

5・6はともに口縁部が直線的に外傾する。5は口縁部・頸部内外面に横方向の撫で調整をおこなう。6は表面の風化が著しく調整は不明である。4～6はいずれも弥生時代後期末月影式前後のものであろう。

7・8は「く」の字状口縁の変形土器である。7は復原口径16cm前後を測る。口縁部は先端をつまみあげ、撫でることにより外側に広い面を作り、ごく浅い凹線を施すが、断面には凸

としてあらわれない。調整は、口縁部外面先端を除いては横方向の撫で調整をおこなう。弥生時代後期前半までさかのばる可能性が高い。

8は北陸東部に多く存在する在地系の「く」の字状口縁の変形土器である。口縁部先端は外側に広く面を取り、頸部の屈曲は強い。弥生時代後期末～古墳時代初頭のものと推定する。

9は変形土器の頸部から胴部にかけての破片である。胴部上半には箆状工具による瓜形の削突が一条めぐる。頸部外面には横方向の撫で調整をおこない、胴部内面には斜め方向の箆削り調整をおこなう。また外面には多量の煤が付着する。弥生時代後期月影式前後に比定できる。

10～12は二重口縁の壺形土器である。10は二次口縁下端を突出させることにより二重口縁状に見せる。二次口縁外面は磨き調整をおこない、一次口縁外面には横方向の撫で調整をおこなう。口縁部内面は風化が著しく、調整については不明である。また口縁部内外面には赤色顔料を塗布した可能性が高い。

11は二次口縁下端に後を作ることによって二重口縁状に見せる。調整は外面には箆磨き調整をおこなうが、内面は風化が著しく不明である。

12は二重口縁壺の二次口縁部である。外反ぎみに広がり、調整は外面は箆磨き調整をおこなうが、内面は風化が著しく不明である。10～12はいずれも弥生時代後期末～古墳時代初頭のものであろう。

13は小型装飾壺の口縁部破片である。復原口径は8cm前後を測る。口縁部はほぼ直立するが口縁先端付近で若干内傾する。調整は外面には横方向の箆磨き調整をおこない、内面は横方向ないし斜め方向の撫で調整をおこなう。弥生時代後期末月影式に比定できる。

14は復原口径20cm前後を測る。内外面ともに箆磨き調整をおこなう。色調は乳白色を呈し、胎土はあまり混入物を含まない。器種は不明である。

15は長頸壺の口縁部破片である。復原口径14cm前後を測り、口縁部は内彎ぎみに広がる。口縁部外面は箆磨き調整をおこない、内面は斜め方向ないし横方向の粗い刷毛目調整の後、撫で調整をおこなう。弥生時代後期末月影式前後のものであろう。

16は珠洲すり鉢の口縁部破片である。口縁部先端は水平に広く面を取り内面が肥厚する。吉岡康暢氏の編年による珠洲Ⅳ期のものと考える。

17は平縁深鉢の口縁部破片である。口縁部に幅の狭い半截竹管様のもので密に菱形に施文する。繩文時代前期後葉諸磧b式系統のものであろう。

以上のように、図示した遺物の多くが弥生時代後期月影式前後に位置づけられるものであり本遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭を中心とする集落であると考える。なお遺跡は現在そのほとんどが水田となっている。

(春日真実)

(2) 塚越古墳 (図版15の49, 文献9) 立山町塚越

塚越古墳は、扇状地末端に立地する塚越遺跡の中に位置している。文献9では、当古墳が頂

部を半らにならして八幡社を建てていること、および直径約20m、高さ2m余りの円墳であると記している。測量の結果、現在、墳丘東北部に方墳状、墳丘南部に突出部状の部分をみることができるが、本来は円墳と判断した。その直径は南北約33m、東西約27mを測る。墳丘最高点の標高は17.110m、裾部の標高は約13mであり、高さは約4mとなる（図版3・4）。副葬品や埋葬施設については不明である。

当古墳の墳丘上からは土器6点を採集した。図示した2点は、いずれも有段口縁壺の口縁部破片であり、うち1点には擬凹線を施している（図版5の18・19）。これら6点は弥生時代後期末の月影式前後に位置するものであるが古墳の築造年代を示すものとは言えない。当古墳の築造年代が塚越遺跡の存続期間の中にあるか、その廃絶であるかの解明は、古墳と集落の関係を考える上で今後の重要な課題である。

（押川恵子）

（3）^{つちこじ}塚越Ⅱ遺跡（図版15の50）立山町塚越

常願寺川扇状地の末端、塚越Ⅰ遺跡の南側に隣接して存在する。標高は約14mを測り、遺跡の規模は南北140m、東西150m程度と推測する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。今回の調査で採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器9片、中世の珠洲壺1片。近世の皿1片を含む越中瀬戸3片、その他時期不明の土師器15片、総計29片を採集した。塚越Ⅰ遺跡の南端にあたる可能性も多い。弥生～古墳時代の集落の在り方を考えるうえで重要な遺跡である。なお本遺跡は現在水田として利用されている。

（4）^{つちこじ}塚越Ⅲ遺跡（図版15の51）立山町塚越

塚越Ⅰ遺跡の西に隣接して存在する遺跡であり、標高約13mを測る。規模は南北70m、東西80m程と推定でき、本調査で新たに発見した遺跡である。時期不明の土師器8片のほか、越中瀬戸皿1片、計9片の遺物を採集している。塚越Ⅰ遺跡の西端にあたる可能性も多い。塚越Ⅰ・Ⅱ遺跡同様弥生時代～古墳時代の集落の構造を考えるうえで重要な遺跡である。なお本遺跡も現在はそのほとんどが水田として利用されている。

（5）^{鉢ノ木}I遺跡（図版15の52）立山町鉢ノ木

常願寺川扇状地の末端近くの微高地に、現在の鉢ノ木集落の東側に隣接する遺跡である。標高は約21mを測り、遺跡の規模は南北550m、東西460mに及ぶと推定できる。今回の調査で新たに発見した遺跡である。採集した遺物は、縄文時代の土器14片、弥生時代～古墳時代の壺形土器1片を含む土器331片（うち弥生時代末～古墳時代と判別するのは36片）、須恵器杯身・壺各2片、壺・甕各1片（計337片）、古代の杯身・椀A・鍋各1片、壺20片を含む土師器55片、杯身5片を含む黒色土器18片、杯B蓋・壺各1片、杯身4片を含む須恵器13片（計86片）、中世の土師器皿15片、器種不明7片、珠洲すり鉢1片、壺5片（計28片）、近世の伊万里系染付4片、京焼系碗4片（うち2片は黄釉のかかったものである）、白磁碗1片を含む近世陶磁器27片、泥面子1点、寛永通宝1点（計29点）、時期不明の土師器320点、総計811点を採集した。弥生～

古墳時代のものが特に多い。これらのうち6点を図示した(図版5の20~25)。

図版5の20・21は有段口縁の変形土器である。20の口縁部は直線的に外傾し、口縁部先端に近づくにつれて徐々に器厚を減じ、口縁部先端は尖りぎみを作る。口縁部外面には3条の擬凹線を施す。

21は直線的に外傾する口縁部を持ち、器壁の厚さは口縁部先端から頸部にかけほぼ均等である。口縁部下端から頸部にかけて大きく屈曲する。調整は口縁部・頸部内外面とも横方向の撫で調整をおこなう。20・21ともに弥生時代後期末月影式前後のものであろう。

22は二重口縁の壺形土器である。二次口縁下端が突出することにより二重口縁状に見える。調整は口縁部内外面ともに刷毛目調整の後、撫で調整をおこなう。古墳時代前期高島式ないしはそれよりやや時期のくらるものであろう。

23は泥面子である。直径3.4cmを測り、恵比須状の顔を型押ししている。近世後期のものであろう。

24は須恵器杯身である。口径は10cm前後と推定できる。立ちあがりはやや内方へ傾斜し、受部はほぼ水平に伸び先端は尖る。表面の焼成は青灰色に還元するが、断面は赤紫色に酸化する。調整は底部外面4/5程度に範割り調整をおこない、その他の外面及び内面は回転撫で調整をおこなう。轆轤回転方向は右。5世紀後半のものに比定できる。

25は須恵器頸部破片である。口径は13cm前後と推定できる。口縁部下端には凸帯が1条巡り、頸部には櫛状工具による波状文を細かいピッチで施す。焼成は24同様、器表面は青灰色に還元するが、断面は赤紫色に酸化し、内面には自然釉がかかる。調整は内外面ともに回転撫で調整をおこなう。轆轤回転方向は右。5世紀後半のものであろう。

以上のことから本遺跡は縄文時代から中・近世に至る複合遺跡であり、その中心となるのは弥生時代末・古墳時代・古代前期であろう。塚越I遺跡より後まで存続した集落遺跡と、考えうる。

(6) 鉢ノ木II遺跡(図版15の53)立山町鉢ノ木

常願寺川扇状地の末端近くの微高地上、鉢ノ木I遺跡の北方約150mの地点に位置し、標高約15.5mを測る。規模は南北100m、東西100mと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。採集した遺物は弥生~古墳時代の土器4片、近世の越中瀬戸椀3片、すり鉢1片、皿3片(計7片)、総計11片である。古墳時代を中心とした集落址と考えるが鉢ノ木I遺跡の北端にあたる可能性も高い。なお本遺跡は現在そのほとんどが水田として利用されている。

(7) 曽我遺跡(図版15の54)立山町曾我

常願寺川扇状地先端部の氾濫原寄りの微高地上に立地し、現在の曾我集落を中心に広がる遺跡である。標高は約24mを測り、遺跡の規模は南北140m、東西170mと推定できる。今回の調査で設定しなおした遺跡である。今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、古代の須

恵器杯B蓋1片、近世の伊万里系染付椀1片、時期不明の土師器11片、総計15片である。なお今回示した遺物は本調査以前に採集されたものである（図版5の26-30）。

図版5の26-28は須恵器杯B蓋である。26は頂部に平坦面を持ち、口縁部は直線的に傾斜する。中央部には擬宝珠形で乳頭状突起のあるつまみを持つ。器壁にはかなりの凹凸がある。調整は頂部を回転糸切りの後、乱雑な静止撫で調整をおこなう。頂部と口縁部の境には輥轆回転を利用した箝削り調整をおこなう。輥轆回転方向は右である。

27は復原口径15cm前後を計る大形品である。頂部に平坦面を持ち、口縁部はゆるやかに傾斜する。口縁端部付近が平坦となり、口縁端部は丸くおさめる。調整は頂部を回転糸切りの後、静止撫で調整をおこない、口縁部外面および内面は回転撫で調整をおこなう。輥轆回転方向は右である。

28は復原口径11cm前後を測る。頂部に平坦面を持ち、口縁部は内彎ぎみに傾斜する。口縁端部付近に短い平坦面を持ち、口縁端部は短く屈曲する。頂部は回転糸切りによる切り離しをおこなう。調整は頂部4/5程度を輥轆回転を利用した箝削り調整の後、静止撫で調整をおこなう。輥轆回転方向は右である。26-28はいずれも9世紀代のものであろう。

29は須恵器杯B身である。高台は貼り付けによるものであり、底部と体部の境より内側について、やや外側にふんばる。底部外面は回転箝切りをおこない、調整は底部内外面とも輥轆回転を利用しない撫で調整をおこなう。8世紀前半までさかのほる可能性がある。

30は珠洲すり鉢の口縁部破片である。復原口径24cm前後を測る。口縁端部に広く水平な面をとり外方に肥厚し、内側へ嘴状にとがる。珠洲Ⅳ期（14世紀）に比定できる。

以上のことから本遺跡は8世紀～中・近世に至る複合遺跡と考えるが、主体となるのは8世紀～9世紀にかけての集落であると考える。

(8) 利田横枕遺跡（図版15の55、文献9・11）立山町利田字横枕

常願寺川扇状地の末端、現在の利田集落の北東に広がる遺跡である。標高は約25mを測り、遺跡の規模は南北400m、東西350mに及ぶものと推定できる。「立山町史」で利田仕入遺跡と呼んでいた遺跡も含め今回新たに設定しなおした遺跡である。仕入地区は昭和43年の送電線工事の際に遺物が出土し、昭和47年に立山町教育委員会が包含層確認のため発掘調査をおこなった。遺物としては弥生時代中期末に比定できる輪描文を施した壺形土器、鉢形土器、蓋形土器等が出土し、また径5～8cm程度の礫を敷きつめた敷石遺構を検出している。一方、横枕地区では昭和48年の八幡川用水の工事の際に多数の土器片が出土し、同年、立山町文化財保護調査委員会が発掘調査をおこなっている。調査では溝に伴う木枕の列及び列石群を確認し、遺物としては9世紀代を中心とする土師器、須恵器の他、桃やトチの果核、木片が出土した。土師器、須恵器の中には墨書き土器も含んでいる。木片の中には木筒を連想させる形のものもあり、当遺跡が通常の村落と異なる性格をもつ可能性のあることを示している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器22片。弥生～古墳時代の変形土器1片を含む土器6片、古代の杯身5片、壺6片を含む土師器62片、黒色土器杯身2片、杯B蓋1片、杯身1片を含む須恵器8片（計72点）、中世の土師器皿10片、珠洲壺1片、青磁1片（計12片）、近世の越中瀬戸碗2片、皿1片、壺1片、伊万里系染付碗2片等陶磁器8片、時期不明の土師器64片、総数181片を探集し、うち2点を図示した（図版5の31・32）。

図版5の31は平縁深鉢の口縁部破片である。口縁部直下にR Lの繩文を横方向に回転させ、その下に半截竹管文が一条走る。縄文時代中期前葉のものに比定できる。

32は復原口径8cm前後を測る浅い土師器皿である。成形は粘土板折り曲げによるものであり、色調は乳白色を呈し、胎土にはほとんど混入物がない。中世後期のものであろう。

以上のことから本遺跡は縄文時代中期から中・近世に至る複合遺跡と考えるが、その中心をなすのは9世紀代を中心とした古代の集落であろう。本調査では96片の古代に属する遺物を探集し、同時期の他の遺跡と比較すると卓越した数となることから遺跡の性格の究明が今後の大きな課題となろう。なお遺物の分布状況は北半に集中している。

（9）利田堀田遺跡（図版15の56）立山町利田字堀田

常願寺川扇状地の末端、利田横枕遺跡の南西に存在する。標高は約29mを測り、遺跡の規模は南北110m、東西130mと推定する。今回新たに発見した遺跡であり、今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、古代の土師器杯身2片、壺4片、黒色土器杯身2片、杯身3片（うち杯B身2片）、杯B蓋1片を含む須恵器7片（計14片）。中世の土師器皿2片、珠洲壺1片、瀬戸碗1片、白瓷系壺1片（計6片）、総計21片を数える。なお今回図示した遺物は本調査以前に採集されたものである（図版5の33～36）。

図版5の33は縄文時代晩期後半の粗製深鉢ないしは弥生時代中期末から後期初頭にかけての変形土器であろう。口縁部は外反しながら広がり、頸部の屈曲はゆるい。調整は胴部外面に施す削り調整をおこなった可能性が高く、口縁部内面には施用工具による磨き調整をおこなう。胎土には砂粒が多く混じる。

34は弥生土器の底部破片である。底径7.5cmを測り、底部と胴部との境には粘土紐の接合痕を確認できる。

35・36は珠洲すり鉢である。35は復原口径30cm前後を測る。体部は内彎ぎみに広がり口縁部に至る。口縁端部は外側に広く面をとり、外方に肥厚する。体部内面には11条からなるおろし目を施し、調整は内外面ともに回転撫で調整をおこなう。輻輪回転方向は右回りである。珠洲Ⅲ期のものに比定できる。

36は復原口径22cm前後を測る。35同様内彎ぎみに広がる体部を持つが、口縁端部は内側に面を取り内側に比厚する。調整は内外面に回転撫で調整をおこなう。珠洲Ⅳ期のものと考える。

以上、本遺跡は縄文時代晩期から中世に至るまで断続的に営まれた複合遺跡と考える。

(10) 利田高見遺跡 (図版15の57、文献9) 立山町利田字高見

常願寺川扇状地の末端近くの微高地に、利田集落の西側100mほどの所に存在する遺跡である。標高約30mを測り、遺跡の規模は南北150m、東西180mと推定する。「立山町史」で利田入場遺跡と呼んでいたものであるが、今回利田高見遺跡と改名した。昭和45年の圃場整備の際に多量の縄文時代の遺物が出土した。器面にあらわす文様には、磨り消し縄文、列点文をつけた隆起帯、三角形連続圧痕文、条痕文などがあり、後期前葉に属するものが多い。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の浅鉢2片、器種不明1片、弥生時代～古墳時代の土器3片、古代の土師器杯身1片、須恵器壺・杯身・壺各1片、器種不明2片(計6片)、中世の土師器皿10片、器種不明1片、珠洲壺4片(計15片)、近世の土師器5片、京焼き系黄釉碗3片、唐津系陶器1片を含む陶磁器27片、寛永通宝1点(計33点)、時期不明の土師器24片。総計84点を採集しうち1点を図示した(図版5の37)。

図版5の37の器形は浅鉢と考える。口縁部にR Lの縄文を横方向に回転させた後、5条以上の沈線を横方向に施す。内面には横方向の磨き調整をおこなう。縄文時代後期中葉～後葉の井口式のものと考える。

以上のことから本遺跡は縄文時代後期から、中・近世に至るまで断続的に営んだ集落遺跡であると考える。本遺跡の東北東約1kmの地点には横沢I・II遺跡が、約1.5kmの地点に二ツ塚遺跡、東北方は約200mの地点には五郎丸遺跡が存在し、縄文時代後期の遺跡が集中して所在していることから、縄文時代後期の集落の在り方を考えるうえで重要な遺跡の一つであると考える。

(11) 縄曲輪遺跡 (図版15の58) 立山町利田字縄曲輪

常願寺川扇状地の末端部、利田小学校の西北方向約50mの地点に存在する。標高約29m、遺跡の規模は南北100m、東西120mを測る。今回の調査では時期不明の土師器12片と越中瀬戸の皿1片を採集し、新たに設定した遺跡である。採集した遺物はいづれも細片であり、遺跡の詳細は不明である。

(12) 五郎丸遺跡 (図版15の59、文献9) 立山町五郎丸

常願寺川扇状地の末端部、現在の五郎丸集落とその周辺を含む。標高26m、遺跡の規模は南北310m、東西290mを測る。以前から多くの縄文土器が採集されており器表にあらわす文様には三角形連続圧痕文、磨り消し縄文、平行して沈線を横走させるもの等があり縄文時代後期前葉のものが中心になると考える。今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器3片。古代の土師器壺1片、須恵器杯身1片、壺1片、器種不明2片(計5片)、近世の伊万里系碗2片、京焼系碗、赤絵磁器碗、染付磁器碗各1片を含む陶磁器25片、時期不明の土師器26片、染付1片。総計63片を採集し、うち1点を図示した(図版5の40)。なお図版5の38・39・41は今回の調査以前に採集したものである。

38は有段口縁の壺形土器である。復原口径11cm前後を測る。口縁部は直線的に伸び、頸部の屈曲は強い。口縁部内外面ともに横方向の箝磨き調整をおこなう。弥生時代後期末月影式前後のものであろう。

39は復原口径10cm前後を測る短頸壺である。調整は内外面とも回転撫で調整をおこなう。焼成は良好であり、外面には若干の自然釉がかかる。時期は不明である。

40は株洲壺の胴部破片である。外面には比較的粗い平行叩きを施し、内面には丸くくぼむ当て具痕を残す。時期は不明である。

41は株洲壺の口縁部破片である。復原口径は36cm前後を測り、口頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部外面から頸部にかけては、口縁部を折り反す際に使用した板状具による圧痕を残す。株洲II～III期のものであろう。

以上、本遺跡は縄文時代後期から中・近世まで、断続的に営まれた複合遺跡である可能性が高い。

(春日真実)

13 横浜^{ヒガハヤ}遺跡 (図版15の60) 立山町横浜字潤高

遺跡は、常願寺川と柄津川が形成した扇状地の末端近くに広がる微高地に立地し、標高は20～25mを測る。高野用水が細川と分流する地点を中心として、東西375m、南北450m程の規模をもつと推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、弥生時代から古墳時代の土器6片、古代の土師器2片、須恵器杯B蓋1片、壺1片、甕5片、器種不明4片、中世の土師器2片、近世の越中瀬戸碗5片、皿4片、すり鉢2片、壺4片、器種不明7片、伊万里系染付2片、京焼系黄釉陶器3片、銭貨1点の他に、時期不明の土師器88片、総計139片であり、このうち縄文土器1片、弥生時代後期末の土器1片、越中瀬戸1片を図示した(図版6の10～12)。なお図版6の2～9は分布調査以前の採集品である。

2は深鉢胴部破片である。横方向に1条の沈線、そこから縦方向に2条の沈線を垂下しており、垂下沈線にそって、貝殻文に似る縄文の押圧を施す。縄文時代中期後葉牟田新II式に属するものであろう。

3は口縁部破片であり、粗製深鉢と推定する。斜方向に回転させたL Rの縄文を施し、口縁部の付近を磨り消している。縄文時代後期から晩期にかけてのものであろう。

4は深鉢胴部破片である。三叉文とそれに沿った沈線文を施し、横方向に回転させたL Rの縄文を一部に残す。縄文時代晩期のものであろう。

5は縄文土器の深鉢口縁部破片であり、口縁端部の近くを除いて、横方向に回転させたR Lの縄文を施している。

6は胴部破片であり、横方向に回転させたR Lの縄文と、逆S字状沈線の一部と推定する文様を施す。縄文時代後期前葉氣屋式に属するものであろう。

7は深鉢口縁部破片であり、数条の沈線を横位に施している。縄文時代後期後葉八日市新保式に属するものであろう。

8は深鉢口縁部破片であり、器内外に丁寧な磨きを施している。縄文時代後期から晩期にかけてのものである可能性が高い。

9は胸部破片であり、粗製深鉢と推定する。植物の茎による条痕を斜方向に施している。縄文時代晩期後葉下野式に属するものであろう。

10は胸部破片であり、浅鉢と推定する。屈曲部より上部は平行沈線を数条横走させ、下部には横方向に回転させたR Lの縄文を施す。縄文時代中期後葉～後期前葉のものであろう。

11は壺形土器の口縁部破片である。有段口縁の外面は4条の擬凹線を施しており、内面は撫で調整を施す。弥生時代後期末の月影式に相当するものであろう。

12は越中瀬戸の椀である。口縁は直立してわずかに内彎する。器内外面には黒色に発色する鉄釉を施している。

以上、本遺跡は縄文時代から近世にかけて長く営まれた遺跡である。

(14) 横沢Ⅱ遺跡 (図版15の61) 立山町横沢字石田

遺跡は、横沢Ⅰ遺跡の西500mに立地し、標高は25mを測る。規模は東西200m、南北250m程と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器3片、古代の土師器2片、須恵器杯身1片、杯B蓋1片、器種不明2片、中世の土師器1片、珠洲2片、近世の越中瀬戸椀1片、皿1片、鉢1片、すり鉢1片、壺4片、器種不明1片、伊万里系染付1片、唐津系陶器1片の他に時期不明の土師器19片、総計42片であり、そのうち珠洲1片を図示した(図版6の1)。

1は珠洲壺胸部破片である。外面には細かい平行叩きを肩部まで施し、内面には丸くくぼむ当て具痕を残す。焼成は良好であり、胎土はやや砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。

本遺跡は縄文時代から近世にまで存続するが、弥生・古墳時代の資料は得られなかった。

(15) 日水遺跡 (図版15の62、文献9・19) 立山町日水字塚田

遺跡は、常願寺川扇状地の末端よりやや扇尖部に近い位置に立地し、標高約30mを測る。高野用水が南北に貫流しており、その両岸が遺跡となっている。東西300m、南北275m程の規模であり、日本集落のほぼ東半部を含むと推定する。

1970年と1971年の圃場整備の際に、須恵器や土師器にまじって縄文時代後期後半に属する土器片や、磨製石斧、撥形打製石斧、石鎌などが出土している。

1981年には、立山町教育委員会が、遺跡の東側端と推定する地点の発掘調査をおこない、掘立柱建物の一部を検出した。遺物では縄文土器、珠洲、施釉陶器が出土している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器3片、弥生時代から古墳時代の土器2片、古代の土師器10片、中世の土師器1片、珠洲2片、瓦器1片、瀬戸1片、近世の越中瀬戸皿1片、

すり鉢2片、壺2片、不明陶器1片、総計26片であり、そのうち土師器1片、珠洲1片を図示した(図版6の13・15)。なお図版6の14・16は分布調査以前の採集品である。

13は土師器杯と推定する。胎土は砂粒を少し含み、内外面に赤彩を施している。8~9世紀頃のものであろう。

14は珠洲の壺であり、口縁部は内外面とも回転撫でを施しており、直立外反する。胸部の外面は平行叩きを施し、内面は丸くくぼむ当て具痕を残す。焼成は良好で堅緻であり、胎土は密であるが若干砂粒がまじる。色調はやや黒みがかった青灰色を呈する。珠洲Ⅰ期に属する。

15は珠洲壺胸部破片である。外面はやや粗い平行叩きを施し、内面は丸くくぼむ当て具痕をこす。焼成は良好で堅緻であり、胎土は砂粒を少し含む。色調は青灰色を呈する。

16は珠洲のすり鉢である。口縁端部は丸味をもち、おろし目はない。口縁部に粘土の継ぎ目痕を残す。焼成は良好であり、胎土は海綿と径3~4mmの砂粒を含む。色調は茶色みがかった青灰色を呈する。珠洲Ⅰ期からⅡ期にかけてのものであろう。

以上、本遺跡も縄文時代から近世まで長く営まれた遺跡である。

(16) ニツ塚遺跡(図版15の63、文献9・21) 立山町ニツ塚字西中ノ島

遺跡は、常願寺川扇状地末端近くの微高地上に立地し、標高は約22mを測る。立山北部小学校の西に位置し、規模は東西200m、南北325mと推定する。

1958年に石原見恵氏を中心として雄山高校が一部の発掘調査をおこない、敷石遺構を検出している。

1975年には富山県教育委員会が、圃場整備にともなう発掘調査をおこない、3個年にわたる調査の結果、縄文時代早期から後期にかけての集落の存在を確認した。多数の竪穴住居址を検出し、遺物は、多量の縄文土器にともない、磨製石斧、石鎌、石匙、石錘、石皿、凹石、すり石、石棒、玉類、土偶などが出土している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器108片、石器1点、古代の土師器2片、中世の土師器1片、近世の越中瀬戸皿1片、壺2片、伊万里系染付1点、総計116片であり、そのうち縄文土器10片、石器1点を図示した(図版6の17~27)。

17は深鉢胴部破片である。2条の垂下する半隆起線間に隆帯をもち、隆帯には爪形の刻みを施している。縄文時代中期中葉天神山式の古い段階に属するものであろう。

18は波状口縁深鉢の口縁部破片である。波頂部は三角形を呈するが、口唇部は肥厚しており、U字形波頂の一部と推定する。口唇部には細い凹線を施し、波頂部は内外面に貝殻による刺突を施す。縄文時代後期後葉井口Ⅱ式に属するものであろう。

19は深鉢口縁部破片である。口縁部付近に刺突文帯をあらわしており、その下部に工字状文の一部と推定する文様を施す。縄文時代中期後葉串田新式に属するものであろう。

20は深鉢胴部破片である。2本の平行垂下範描沈線文と、その間を斜行する2本の範描沈線

文とを施しており、葉脈状文の一部と推定する。縄文時代中期後葉串田新式に属する。

21は深鉢胴部破片であり、2本の浅い平行沈線を施している。縄文時代後期から晩期にかけてのものであろう。

22は口縁部破片であり、波状口縁の深鉢と推定する。沈線により四角文をあらわす。縄文時代後期前葉のものであろう。

23は縄文土器の深鉢胴部破片であり、縦方向に回転させたR L Rの縄文を施している。

24は縄文土器の深鉢胴部破片であり、縦方向に回転させたR Lの縄文を施している。

25は深鉢底部付近の破片であり、細い条線を縦方向に施す。縄文時代中期前葉のものである。

26は深鉢底部破片であり、底部外面には網代圧痕を残す。縄文時代後期のものであろう。

27は磨石であり、重さは190.8g、石材は安山岩である可能性が高い。

本遺跡は扇状地におけるたしかな縄文時代中期の遺跡として重要であり、縄文時代早期と古代一近世の資料も存在する。

(17) ニツ塚経塚 (図版15の64・65、文献10) 立山町ニツ塚字西中ノ島

ニツ塚遺跡の東辺、御経塚と呼ばれる森林内に位置する小規模な経塚と推定できるものである。図版15の64は直径約6m、高さ約0.5m、65は直径約8.3m、高さ約1.5mを測る。地元の伝承では夫婦塚と呼び、一字一石経塚であったというが確証はない。

今回の調査では、遺物を採集できなかった。

(18) ニツ塚畠田遺跡 (図版15の66) 立山町ニツ塚字畠田

遺跡は、ニツ塚遺跡の北約300mに立地し、標高は約18mを測る。規模は東西250m、南北225m程と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器26片、石錐1点、弥生時代から古墳時代の土器1片、古代の土師器3片、中世の土師器6片、珠洲2片、近世の越中瀬戸椀1片、皿3片、壺1片、器種不明1片、伊万里系染付2片、唐津系陶器1片の他、時期不明の土師器13片、総計61片である。そのうち縄文土器4片、石錐1点、古代の土師器1点、中世の土師器1片、珠洲1片を図示した(図版6の28~35)。

28は深鉢胴部破片であり、半隆起線による渦巻文の一部と推定する文様をあらわす。上半部の無文帯には連続刺突を施している。縄文時代中期中葉天神山式に属するものであろう。

29は口縁部破片である。太い平行沈線を施し、そのうちの1本は後から更に施書きを加えている。縄文時代後期のものであろう。

30は口縁部破片であり、浅鉢と推定する。外面は磨きと三角連続圧痕文を施す。縄文時代後期前葉氣屋式に属するものであろう。

31は縄文土器の胴部破片であり、縦方向に回転させたR Lの縄文を施している。

32は土師器の椀と推定する。色調は淡澄色を呈する。9世紀頃のものであろう。

33は土師器の皿である。胎土は砂粒をほとんど含まず、色調は乳白色を呈する。口縁部の一部には煤が付着しており、燈火器として用いている。中世後期のものであろう。

34は珠洲更胴部破片である。外面にはやや粗い綾格状平行叩きを施し、内面は丸くぼむ當て具痕をのこす。焼成は良好で堅緻であり、色調は青灰色を呈する。

35は平基有茎石鐵であり、先端と基部をわずかに欠損している。残存長は3.6cm、残存基部幅は1.7cm、重さは2.0gである。石材は流紋岩の一種であるリソイダイトの可能性が高く、立山町付近と黒部市小川付近で産出する。

以上、本遺跡は量は少ないものの縄文時代から近世に至る遺物が散布する。

(1) 浦田石田遺跡 (図版15の67、文献9) 立山町浦田字石田

遺跡は、常願寺川と白岩川が形成した扇状地の末端に分布する微高地上に立地し、標高は約17mを測る。立山町指定文化財である大蔵塚（浦田新経塚）の周辺に広がっており、規模は東西125m、南北150m程と推定する。今回あらたに設定した遺跡である。

1956年に石原見恵氏が縄文時代中期末葉から後期初葉にかけての土器を採集している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、弥生時代から古墳時代の土器16片、古代の須恵器1片、中世の土師器6片、近世の越中瀬戸楕2片、皿5片、すり鉢1片、壺1片、伊万里系染付4片の他、時期不明の土師器41片、総計78片である。

(2) 大蔵塚 (図版15の68、文献10・18) 立山町浦田字高木石田

浦田石田遺跡内に位置する高さ1.7m、径6m程の経塚であり、1974年には立山町指定文化財となっている。室町時代に築かれたものであるらしい。浦田新経塚ともいう。

1980年には立山町教育委員会が発掘調査をおこない、墳丘を截ち割った結果、一字一石経、白磁、弥生時代後期末の土器が出土した。

今回の調査では、一字一石経1点を採集したが、判読できない。

(3) 浦田馬渡し遺跡 (図版15の69) 立山町浦田字馬渡

遺跡は、常願寺川と白岩川が形成した扇状地の末端に分布する微高地上に立地し、標高は約13mを測る。小河川である細川の東岸に広がっており、規模は東西225m、南北250m程と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、古代の土師器10片、須恵器杯B蓋1片、杯B身1片、壺2片、器種不明1片、中世の土師器5片、珠洲1片、近世の越中瀬戸壺1片の他、時期不明の土師器21片、総計43片である。

(4) 浦田西反遺跡 (図版15の70、文献9・16・19) 立山町浦田字西反

遺跡は、常願寺川扇状地末端に分布する微高地上に立地し、標高約15mを測る。規模は東西200m、南北150m程と推定する。

過去には、土器が2点出土している。そのうちの1点は文献9に載せている鉢形土器であり、

弥生時代後期末に属するものである。

1978年には立山町教育委員会が発掘調査をおこない、その結果、縄文時代、古墳時代、中世の集落の存在を確認した。柱穴状遺構を検出し、縄文時代晩期の土器、石器、古墳時代初頭の土師器壺、壺、高杯、器台、蓋、瓶形土器、奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器、中世の珠洲が出土している。1986年には倉庫建設にともなう試掘を、1987年には住宅建設にともなう試掘を立山町教育委員会がおこなっている。

今回の調査で採集した遺物は、弥生時代から古墳時代の土器12片、中世の土師器皿4片、近世の越中瀬戸皿2片、総計18片であり、そのうち弥生土器一片を図示した(図版6の36)。

36は壺ないし壺形土器の口縁部破片であり、内外面に撫で調整を施す。口縁は立ち上がりの短い有段であり、外面に2条の凹線を施す。弥生時代後期末のものであろう。

以上、浦田地区には縄文時代から近世に至る遺跡が特に多く所在する。

(23) 上野Ⅰ遺跡(図版15の71) 立山町上野字前田

遺跡は、常願寺川扇状地で三郷利田用水が灌漑する水稲耕作地帯に立地し、標高は約43mを測る。規模は東西125m、南北150m程と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、古代の土師器1片、近世の土師器土製品3片、越中瀬戸椀1片、皿1片、すり鉢1片、壺3片、青磁1片、総計13片である。

(24) 上野Ⅱ遺跡(図版15の72) 立山町上野字三枚田

遺跡は、上野Ⅰ遺跡の西300mに位置し、標高は約42mを測る。東西100m、南北50m程の規模と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、中世の土師器皿1片、近世の越中瀬戸皿2片、壺1片、器種不明4片、染付陶器1片の他に、時期不明の土師器8片、総計17片である。

(25) 上野Ⅲ遺跡(図版15の73) 立山町上野字王加口

遺跡は、常願寺川扇状地では最も川岸に近い微高地に立地し、標高は約41mを測る。遺跡の規模は東西50m、南北25m程と推定する。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、中世の土師器5片、近世の越中瀬戸椀1片、器種不明13片、唐津系陶器1片の他に、時期不明の土師器9片、総計29片である。

以上、上野Ⅰ～Ⅲ遺跡は若干の縄文土器を除くと、古代以後に盛んとなる遺跡である。

(26) 日置遺跡(図版15の74) 立山町日置字穴田

遺跡は、常願寺川と白岩川が形成した扇状地の、三郷利田用水が灌漑する水稲耕作地帯に立地し、常願寺川に近い。標高は約52mを測る。県道富山・立山公園線が北陸自動車道と立体交差する高橋の北側に位置し、遺跡の規模は東西125m、南北75mと推定する。日置集落の南東350m、また日置神社の東400mにあたる。今回あらたに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、古代の土師器3片、中世の土師器皿2

片、近世の越中瀬戸皿2片、すり鉢1片、香炉1片、器種不明2片、伊万里系染付1片の他に、時期不明の土師器3片、総計17片であり、そのうち縄文土器1片を図示した（図版6の37）。

37は深鉢胴部破片であり、横方向に回転させたR Lの縄文と、横位で2条の沈線文を施す。縄文時代後期のものであろう。

本遺跡も若干の縄文土器を除くと、古代以後の資料が多い遺跡である。

(2) 前田經塚（図版15の75）立山町浦田字前田50番地

二ツ塚畠出遺跡の北西200mに位置し、高野用水の脇に立地する。直径約15m、高さ約1.2mを測る。今回の調査で、一字一石経を採集したことにより、經塚と認定した。

今回の調査で採集した遺物は、一字一石経1点である（図版6の38）。

38は一字一石経であり、片面に「輪」の字を墨書きしている。 (安英樹)

(2) 上末古窯跡群（図版16の18~22、文献9・10・14・28）立山町上末

立山町上末窯において採集した須恵器の総計は291片、口縁部8.7個体分である。その器種構成は杯Aは12片・0.5個体分、大型杯Aは1片・*個体分（口縁部が存在するが数値として表われないもの）、杯Aまたは杯Bは20片・0.8個体分、杯B蓋は18片・1.7個体分、杯B身は14片・0.5個体分、碗Aは11片・0.3個体分、碗Aと考えられるものは59片・1.7個体分、碗Bは2片、皿Aは3片・0.9個体分、皿Bは1片・0.2個体分、皿Bと考えられるものは1片・0.1個体分、鉢は1片・0.1個体分、盤は1片・0.1個体分、盤である可能性が高いものが1片、盤Aまたは大型杯Aは2片・*個体分、横瓶は1片・0.1個体分、壺は108片・0.8個体分、甕は35片・0.9個体分である。胎土はおおむね黒色粒を混える砂粒を含み、焼成はいずれも良好である。色調は青灰・青灰褐色のものが主である。これ以外の胎土・焼成・色調をもつ場合は、個々に記す。

上末窯釜谷支群釜谷2号窯：釜谷2号窯は灰原が露出しており、そこから採集した。総計は36片・2.6個体分であり、そのうちわけは杯Aが6片・0.3個体分、大型杯Aが1片・*個体分、杯B蓋は9片、1.3個体分、杯B身が1片、杯Aまたは杯B身が8片・0.4個体分、皿Aが2片・0.5個体分、盤Aあるいは大型杯Aは2片・*個体分、横瓶は1片・0.1個体分、壺は2片、甕は4片である（図版7の1~27）。

1~11は杯B蓋である。胎土に1~3mmのやや大きな砂粒を含むものは1・6・9である。内外面に自然釉がかかっているものは1・11、口縁端部より内側約1cmの外面に自然釉がかかることは3・4・6・7・9であり、そのうち重ね焼きによる熔着痕を内外面ともに認めるものは4・7・9である。つまみがついているものは1、つまみがついていたと認定できるものは3・5・6・11である。口縁端部がシャープに屈曲するものは1~8、鈍く屈曲するものは9・10・11である。頂部と口縁部の境外面に狭い帯状の回転箝削りを施すものは1・5・7・10である。箝切り後に回転撫で調整を施すものは1・6・11であり、11には粗い撫でを施している。口縁部の外面にはすべて回転撫で調整を施す。輪轂の回転方向がわかるものは2であり、回転方向は右であ

る。内面は全面に回転撫で調整を施すが、内面中央に仕上げ撫でを施すものは1である。

12~15は杯Bである。底部内面は回転撫で調整を施す。底部内面中央に仕上げ撫でを施しているものは15である。体部内外面にはすべて回転撫で調整を施す。底部外面が箒切り後に軽い撫でを施すだけのものは13・15である。高台がつく13・14・15のうち、貼りつけの接合痕を認めうるのは13である。

16・17は杯Aまたは杯B身の口縁部である。口縁端部を丸くおさめているものは16、うすくやや外反するのが17であり、内外面とも回転撫で調整を施している。

18・19は杯Aである。口縁端部は直立ぎみに丸くおさめ、内外面とも回転撫で調整を施す。19の底部外面は箒切り後に軽い撫でを施す。

20は盤または大型杯Aである。内外面とも回転撫で調整を施し、底部内面に粘土の継ぎ目を認めうる。

21・22は皿Aである。21の色調は断面が黄灰褐色、外面は灰褐色を呈す。22の内外面には、自然釉がかかる。内外面とも回転撫で調整を施しているが、21は内面中央に不定方向の撫でを施し、底部外面は箒切り後、軽い撫で調整である。22は底部外面に箒切り後、回転撫で調整を施している。

23は鉄鉢形鉢である。内外面とも回転撫で調整を施す。

24・25は壺である。24は内外面に黒色の自然釉がかかっており、25は外面に緑色の自然釉がかかっている。内外面とも回転撫で調整を施す。

26・27は壺である。26は頸部に成形時の粘土の継ぎ目があり、内面は回転撫で調整、体部内面は同心円文、外面は頸部から肩部にかけて回転撫で調整、その下は不定方向の撫でを施し、平行叩きを施している。27は内面が同心円文、外面は平行叩きの上に構造工具により7mmに9本の単位の不定方向の調整を施している。

蓋谷3号窯：採集した須恵器は総計133片・3.1個体分であり、そのうちわけは杯Aが3片・0.1個体分、杯B蓋は4片・0.2個体分、杯B身は9片・0.5個体分、杯Aまたは杯B身は7片・0.4個体分、皿Bは1片・0.2個体分、皿Bと考えられるものは1片・0.1個体分、鉢は1片・0.1個体分、壺は82片・0.8個体分、壺は25片・0.9個体分である（図版7の28~39、図版8）。

28~30は杯B蓋である。つまみの無いものは30、28・29は有無を確認できない。口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面は回転撫で調整を施し、30の頂部外面に箒切り、頂部と口縁部の境外面に狭い帯状の回転箒削りを施している。

31・32は杯Bである。内外面とも回転撫で調整を施す。31の底部外面は箒切り後に軽い撫でを施すだけであり、高台は貼り付けの接合痕を残す。

33・34は皿である。33は内外面が茶褐色を呈す。34は外面に自然釉がかかっている。内外面に回転撫で調整を施す。34は底部外面に粘土紐巻上げ痕と高台の貼り付け痕を残す。

35は鉢である。胎土に海綿の骨片を含む。内外面とも回転撫で調整を施しており、頸部に成形時の接合痕を残す。

36~39、図版8の1~11は壺である。11は1~3mmのやや大きな砂粒と薬状のもの、海綿の骨片を含んでいる。口頸部内外面に自然釉がかかっているものは37・38・1・2であり、緑色の自然釉がかかっているものは37・2である。外面のみに自然釉がかかっているものは4・5・6・10であり、6は緑色の自然釉がかかっている。内外面とも回転撫で調整を施していることは共通しているが、37は口縁部と頸部の間に不定方向の撫でを施す。耳は縱方向の撫でを施している。また成形時の接合痕を残すものもあり、口縁部に残すものは1、頸部に残すものは2・3・5である。1は頸部外面に1条の沈線がめぐらし、3・6は肩に2条の沈線がめぐらし、4は肩に1条の突帯をめぐらし、7・8は2条の突帯をめぐらす。成形順序は肩に双耳を貼り付けてから突帯を貼り付けている。なお10は焼台に使用したらしく、底部外面に径7cmの製品の底部の1部が接着し、そのまわりに自然釉がかかっている。

12~15は壺である。胎土に薬状のものを含むものは12・15、1~3mmのやや大きな砂粒を含むものは13である。内外面は回転撫で調整を施す。12は内面の同心円文が、頸部より約4cm下から始まり、外面の平行叩きは頸部より約2cm下から3cmに6本の単位で施す。内面に扁状文をもつものは13・15であり、13は頸部より約2cm下からはじまっている。外面の叩きは13が頸部から格子状叩き、15は3cmに6本の擬格子状叩きを施す。

法光寺谷3号窯：採集したのは窯体内と灰原からで、総計72片・1.7個体分である。そのうちわけは楕Aが6片・0.3個体分、楕Bと考えるものは48片・1.2個体分、盤は1片・0.1個体分、壺は15片・0.1個体分。壺は2片である（図版9の1~8）。

1~5は楕である。4は断面が黄灰褐色、外面が灰褐色、5は断面が灰白色、外面が灰色を呈す。内外面とも回転撫で調整を施すが、底部外面に回転糸切り痕を残すものは3・4、箇切り後に軽い撫で調整だけのものは5である。なお3・4の糖轆回転方向は右である。

6・7は壺である。6は内外面暗黒灰色を呈し、7は断面が灰褐色、外面が暗灰色を呈す。内外面とも回転撫で調整を施しており、6の耳は縱方向の撫でを施す。

8は壺である。内外面は暗灰褐色を呈し、自然釉がかかっている。内面は扁状文、外面は5cmに9本の単位の平行叩きを施す。

法光寺谷5号窯：採集した須恵器は総計25片・0.9個体分であり、そのうちわけは楕Aが5片、楕Bと考えるものが11片・0.5個体分、楕Cは2片、皿Aが1片・0.4個体分、盤と考えるものが1片、壺は3片、壺は2片である（図版9の9~20）。その他に、鉄滓を4点採集している。

9~11は楕と考える。9は断面が茶褐色、外面が赤褐色、10は断面が淡黄褐色、外面が黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。11は内外面に自然釉がかかっている。内外面とも回転撫で

調整を施している。

12・13は碗Bである。12は内外面が黄灰褐色、断面が淡茶褐色を呈し、焼成はやや不良である。13は断面が灰褐色、外面が暗灰色を呈す。内外面とも回転撫で調整を施す。

14～16は碗Aである。14は内外面に黒緑色の自然釉がかかっている。15は内面が黄褐色、断面が淡黄灰色、外面が黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。内外面とも回転撫で調整を施すが、底部外面に回転糸切り痕を残すものは14・15である。なお轆轤回転方向は右である。

17は皿である。口縁端部内面に自然釉、外面に火だしきがある。内外面とも回転撫で調整を施すが、底部外面に回転糸切り痕を残す。なお轆轤回転方向は右である。

18は器種を同定できない。内面が暗黒灰色、断面が紫褐色、外面が紫灰色を呈し、外面に自然釉がかかっている。内外面とも回転撫で調整を施す。

19・20は甕である。内面に肩状文、外面に3cmに6本の単位の平行叩きを施す。

25地区：1986年度調査25地区で採集した。その総計は25片・0.4個体分であり、そのうちわけは杯Aが3片・0.2個体分、杯Bは4片・*個体分、杯Aまたは杯Bは5片・*個体分、杯B蓋が5片・0.2個体分、壺が6片、甕が2片である。須恵器以外には中世の瓦器1片、青磁1片を採集している（図版9の21・22）。

21・22は杯である。21は杯Bであり、体部外面に自然釉がかかっており、暗黒灰色を呈す。内外面は回転撫で調整を施し、22は底部外面も丁寧な回転撫で調整を施している。

須恵器の編年と器種構成について：立山町上末窯採集須恵器は発掘品ではないが、窯との関係が明らかな良好な資料である。そこで窯を単位として型式と器種構成の変化について考察し、位置づけを試みたい。

杯B蓋についてみると、釜谷2号窯では大型品を一定程度含み、すべてつまみがあったと考える。またその調整をみると、頂部と口縁部の境外面を帯状に削るものが多く、口縁端部の屈曲がシャープなものを含んでいる。釜谷3号窯では口径10～13cm程度の小型のものが主である。つまみはないものが多く、頂部と口縁部の境外面を帯状に削るものも少ない。口縁端部は厚く、屈曲も甘く、回転糸切り離しによるものが主流である。これらに対して法光寺谷3号窯・同5号窯では蓋を確認できない。

杯B身についてみると、釜谷2号窯では高台がしっかりしており、やや外方にふんばったものと大型品を含む。釜谷3号窯では高台のつくりがやや粗雑であり、蓋と同様に大型品は乏しい。法光寺谷3号窯・同5号窯では高台が著しく矮小化するとともに、底部外面に回転糸切り痕を残すようになる。また同様の特徴をもつ碗Aが出現してくる。

甕についてみると、釜谷2号窯ではすべて内面が同心円文であり、釜谷3号窯・法光寺谷3号窯・同5号窯では肩状文があらわれている。また平行叩きの原体単位も粗くなる傾向をみることができる。

第1表 立山町上末窯採集須恵器の器種構成比

	杯B	杯A	椀B	椀A	皿A・B	盤・鉢	横瓶	壺	甕	総 数
釜谷2号窯	60 (39.8)	16 (31.0)			20 (5.3)	4 (5.3)				38片、2.5個体分
釜谷3号窯	25.8 (11.0)	6.5 (4.1)			9.7 (1.5)	3.2 (0.8)	25.8 (63.3)	29 (19.3)		130片、3.1個体分
法光寺谷3号窯					88.2 (75.0)	5.9 (1.4)		5.9 (20.8)	3.8 (12.0)	72片、1.7個体分
法光寺谷5号窯					55.6 (8.0)	44.4 (64.0)			25片、0.9個体分 (8.0)	

(杯Bは蓋・身の多い方の数値を採用した。杯Aもしくは椀B身のように器種を同定できないものは、同定できるものの比率に応じて配分した。比率はI線部残存率によって計算し、割合内に破片数による比率を付した。単位:%)

以上から上末窯の資料は、釜谷2号窯→釜谷3号窯→法光寺谷3号窯・同5号窯の順に編年できると推察する。またその年代は他地域の例と対比して、釜谷2号窯が9世紀初め頃、釜谷3号窯が9世紀末から10世紀初め、法光寺谷3号窯・同5号窯が10世紀中頃と考えたい。これら4つの窯に、釜谷2号窯に先行する資料を含む法光寺谷1号窯群¹²を加えると、上末窯の操業期間は8世紀後半から10世紀中頃までと考える。

以上の編年をもとに器種構成をみると、釜谷2号窯では食膳具(杯・椀・皿)が96.0%と大きな比率を占めている。これに対して釜谷3号窯では食膳具が42.0%に対して、貯蔵具(壺・甕)が54.8%と上回っていることが注目される。法光寺谷3号窯では食膳具が88.2%であり、再び貯蔵具を大きく上回るようになった。

器種構成比は発掘資料を蓄積しないと確かなことは言えないが、釜谷3号窯においては壺・甕類の大量焼成という、新しい動向が生じてきていた可能性を考えたい。しかしその動きが10世紀に続かないとするならば、上末窯が北陸で最も新しい段階まで操業するものの、中世窯に展開しなかった1つの理由となるのではないかと考える。

(田中道子)

(4) その他

遺跡として設定した地区外の採集品である(図版6の39~44)。

39は第8地区で採集した縄文土器であり、地文に縄文を施し、S字状沈線の一部と推定する文様を残す。縄文時代後期井口式に属するものであろう。

40は第9地区で採集した縄文土器であり、無文隆帶と半隆起線による渦巻の一部と推定する文様を施す。縄文時代中期中葉天神山式に属するものであろう。

41は第10地区で採集した近世の伊万里系染付であり、高台側面と体部外面に藍染付を施す。

42は第14地区で採集した近世後期の土製品である。猿の顔状の文様を型押している。

43は第16地区で採集した越中瀬戸の管状陶錐であり、器面には鉄釉を施す。約1/2が残存し、重さは10.6gである。

44は第17地区で採集した越中瀬戸の管状陶錐であり、器面には鉄釉を施す。約1/5が残存し、重さは5.2gである。

(安英樹)

2 遺物の散布状態（第5～9図）

1987年度の調査においては、Ⅲ地区から2609片・口縁部21.1個体分、Ⅰ地区の上末窯付近から297片・8.7個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世に至るものであり、特にⅢ地区採集品はⅠ・Ⅱ地区的資料と様相を異にするところがある。これらのうちある程度、年代を判別できた縄文時代213片・2.3個体分、弥生・古墳時代758片・1.5個体分、古代271片・1.2個体分、中世141片・3.8個体分、近世321片・12.0個体分について、構成と時期別の散布状態を示そう。

（1）縄文時代遺物の散布状態（第5図）

縄文時代の遺物は、土器210片・0.3個体分、石器3点（石鏃1点、磨石1点、黒耀石チップ1点）である。縄文土器のうち年代が判るものは、前期1点を除くと、すべて中期初め以後のものである。また中期の土器より後期の土器が多く、晩期の土器も存在する。そして深鉢が多いが、浅鉢も少なからず含んでいる。

採集資料は、立山町浦田二ツ塚遺跡が所在する7二地区からのものが109片と多数を占めるが、これ以外の地区にも少量ずつはあるが広く散布している。そしてⅢ地区北部の扇状地末端の微高地ばかりでなく、南部の扇央部に近い地区にも散布地が広がっている。二ツ塚遺跡の採集地点が発掘区付近であることを考慮すると、その散布は少数分散型と考える。

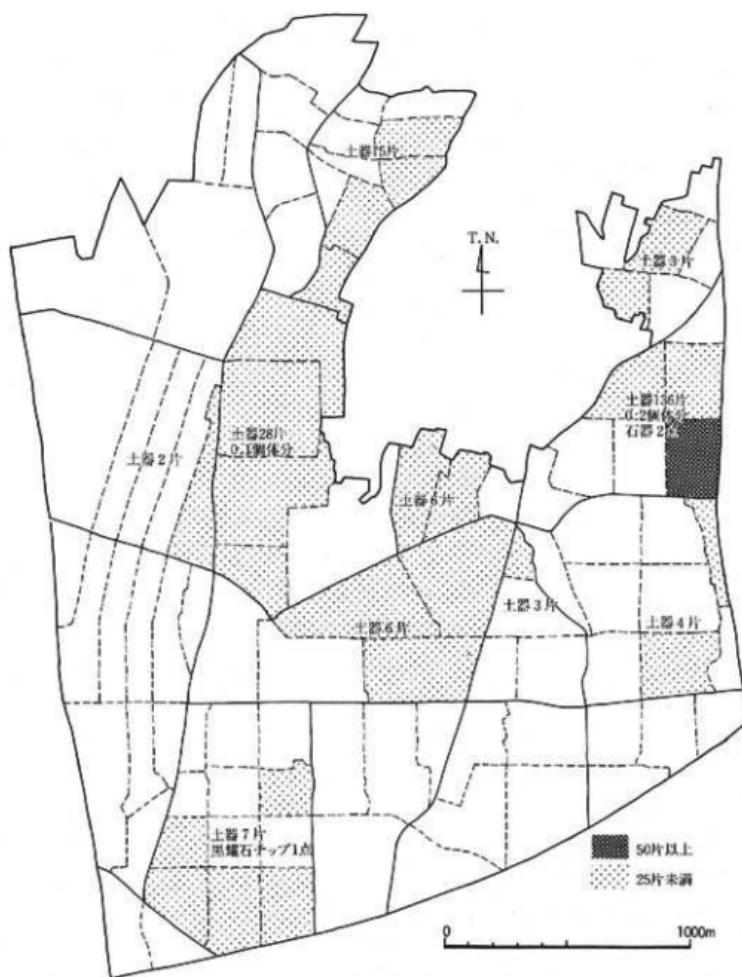
（2）弥生・古墳時代遺物の散布状態（第6図）

弥生・古墳時代の遺物は、土師器758片・1.5個体分、須恵器6片である。これらのうち、器種を判別できたものは、土師器が擬凹線有段口縁壺形土器5片・0.1個体分、無文有段口縁壺形土器5片・0.1個体分、「く」字状口縁壺形土器11片・0.4個体分、壺形土器11片・0.4個体分であり、須恵器は杯2片、壺3片、壺1片である。年代は弥生時代後期から古墳時代中期末（5世紀末）に至る。発掘調査の所見によるならば人の居住は弥生時代中期初めにまで遡るが、当期における盛期は弥生時代後期末～古墳時代中期と推測する。

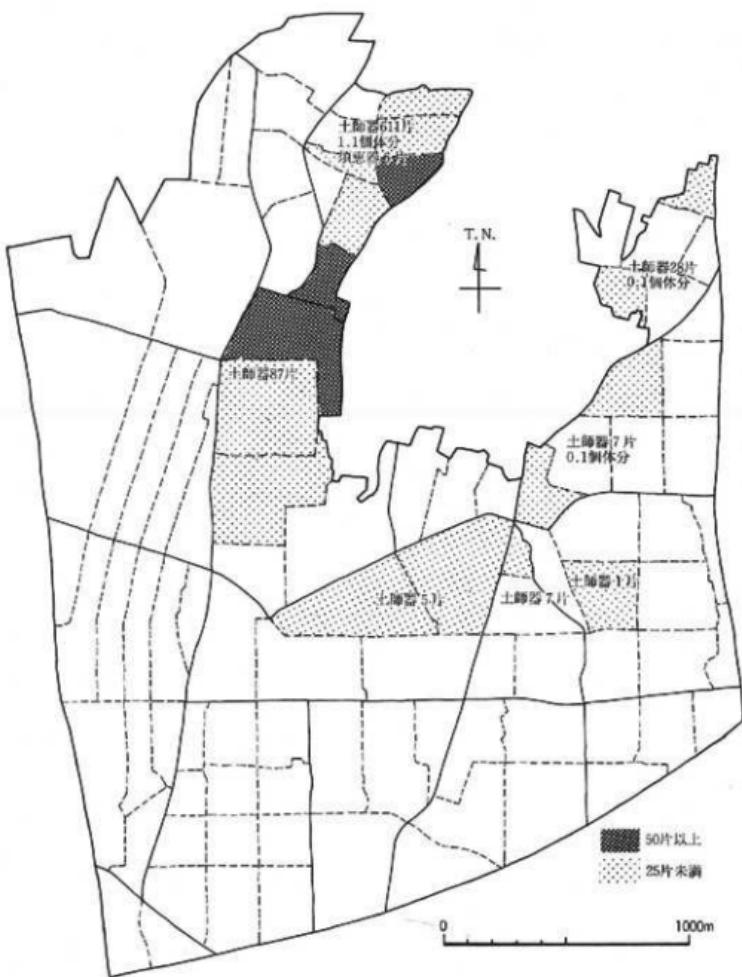
当期の資料は、Ⅲ地区北部の扇状地末端に集中して散布している。そしてやや詳しくみると、扇状地が微高地としてデルタ内に突出する部分が居住適地として特に選ばれたらしい。これらの中では、西側に突出する微高地に立地する塙越Ⅰ遺跡と鉢ノ木Ⅰ遺跡とが最も大きな集落であった可能性が高い。

（3）古代遺物の散布状態（第7図）

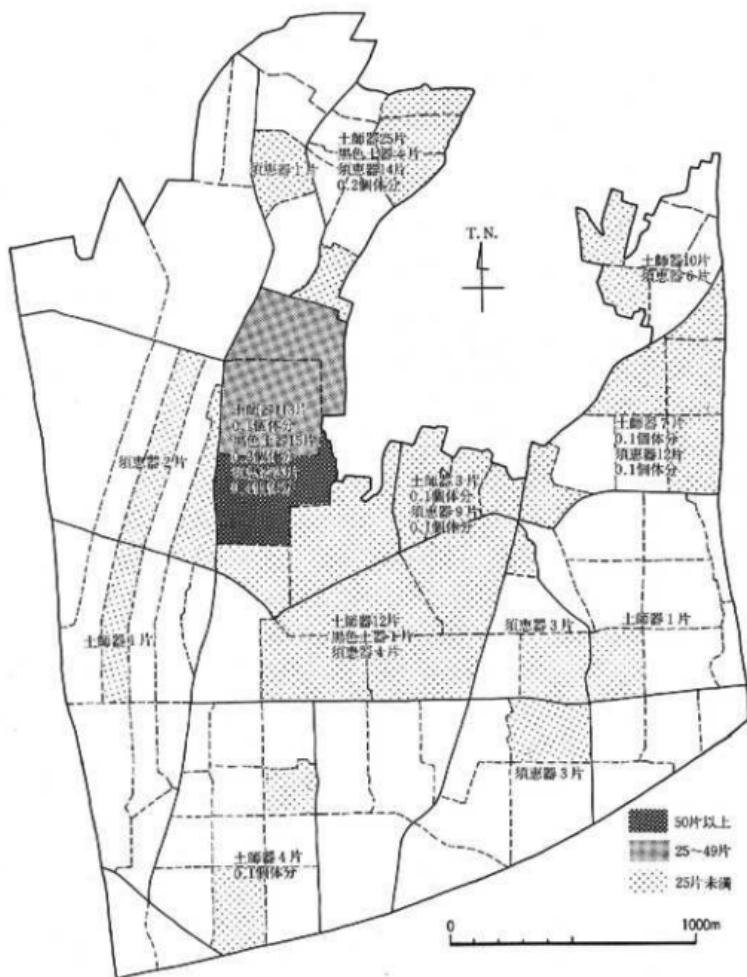
古代の遺物は、土師器176片・0.4個体分、黒色土器22片・0.2個体分、須恵器73片・0.7個体分を採集した。器種を判別できたものは土師器が杯A11片・0.1個体分、碗A2片・0.1個体分、壺形土器41片・0.2個体分、鍋2片であり、黒色土器は杯9片・0.1個体分を数える。須恵器は杯A1片、杯B蓋13片・0.3個体分、杯B身1片、杯Aもしくは杯B身9片・0.2個体分、壺4片、壺22片である。年代は8世紀中頃から10世紀に至るものが多く、その前後のものも少量存



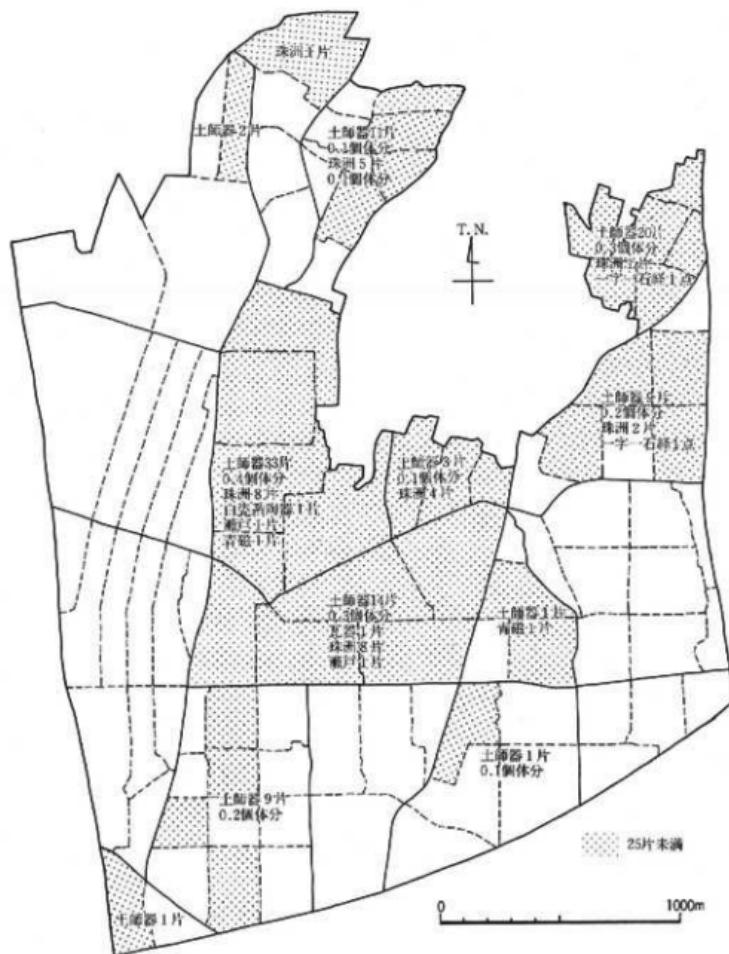
第5図 Ⅲ地区縄文時代遺物の散布状態(地区名は第4図参照)



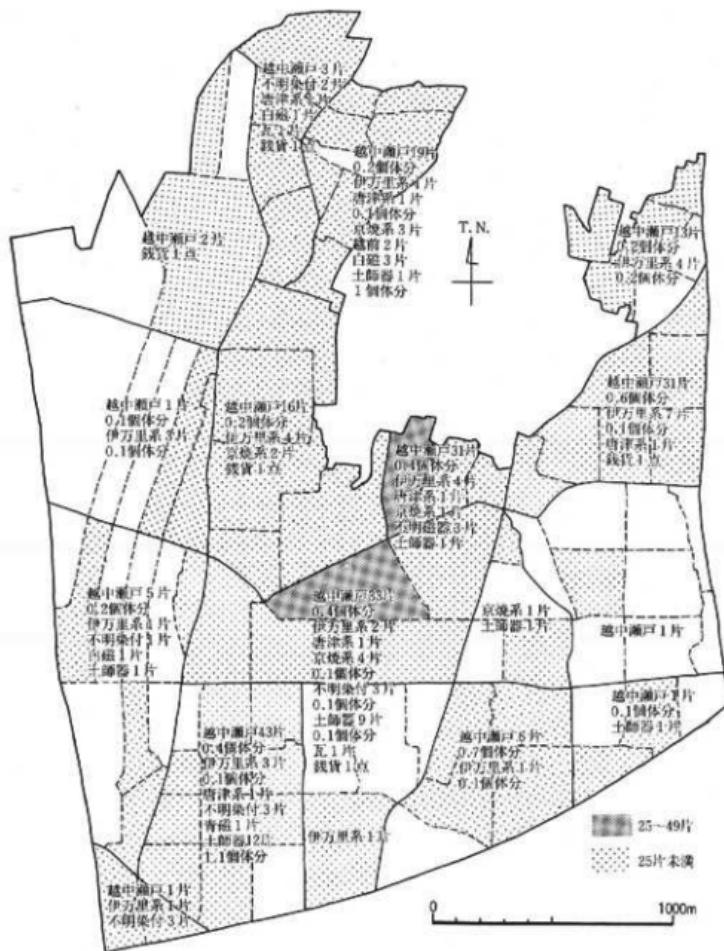
第6図 Ⅲ地区弥生～古墳時代遺物の散布状態



第7図 Ⅲ地区古代遺物の散布状態



第8図 Ⅲ地区中世遺物の散布状態



第9図 Ⅲ地区近世遺物の散布状態

在するが、7世紀の資料は確認できない。

当期の資料は、弥生・古墳時代と同様にⅢ地区北部の扇状地末端に多いが、南部の扇央に近い部分にも、再び散布するようになってきている。これらの中では、西側に突出する微高地基部に立地する利田横枕遺跡付近に散布の中心地がある。

(4) 中世遺物の散布状態（第8図）

中世の遺物は土師器104片・1.8個体分、須恵器（珠洲）29片・0.1個体分、その他8片・2.0個体分である。このうち器種を同定できたものは、土師器が皿A 67片・1.6個体分、須恵器が甕25片、すり鉢4片・0.1個体分、その他が瓦器火舍1片、瀬戸系椀1片、瀬戸系香炉1片、白瓷系甕1片、青磁碗1片、青磁香炉1片、一字一石経2点である。採集した破片数は古代よりも少ないが、土器に椀形態と煮炊具が乏しいことを漆器椀と鉄製鍋・釜の普及によるとみるとみるならば、人々の活動が低下したとは考え難い。

当期の資料も古代と同様に調査地区に広く散布するが、弥生時代～古代までと異なり、集中地点に乏しい。少数分散型の散布の様相を呈していると考える。

(5) 近世遺物の散布状態（第9図）

近世の遺物は、越中瀬戸206片・3.6個体分、その他の陶磁器77片・1.4個体分、土師器31片・2.2個体分、銭貨5点、瓦2片を採集した。なお近代の資料も出来る限り採集し、近世資料からは除いたが、若干はこれを含んでいる可能性がある。器種を判別できたものは、越中瀬戸が椀42片・0.7個体分、皿55片・1.7個体分、鉢1片、すり鉢16片・0.2個体分、壺50片・0.2個体分、香炉7片・0.2個体分、管状陶錐2片・0.6個体分である。その他の陶磁器は、伊万里系染付34片・0.7個体分については椀19片・0.3個体分、皿1片・0.1個体分であり、刷毛手唐津6片・0.1個体分は確実ではないが、椀と大型鉢がある。黄釉を施す京焼系の陶器14片・0.3個体分は、椀13片・0.2個体分、燈明台1片・0.1個体分から成り、これらのほかに産地不明の染付が12片・0.2個体分、白磁5片・0.1個体分、青磁1片、及び越前2片がある。土師器には、皿A 2片・0.1個体分、型押土製品6片・2個体分（泥面子2個体を含む）がある。銭貨はすべて寛永通宝であり、瓦は棟瓦である。以上の資料のうち灰釉を施す越中瀬戸のように近世初めに遡る資料もあるが、大多数は近世中頃（18世紀）以後のものである。

これらの資料はⅢ地区にほぼくまなく散布している。ただし各期を通して破片数では二番目、口緑部では最も多くの資料を採取したにもかかわらず、50片を越える地区はない。また当期の継続期間は他期に比べて短いことを考慮するならば、小規模分散型のまま、近世中頃に著しく陶磁器の消費量を高めたと推定できる。

(6) 遺物の散布について

上記の散布状態について気付いた点を示す。

縄文時代の遺物は、ほとんどが中期以後に属している。既往の発掘調査の成果によれば、ご

く少量の早期押型文土器が存在するが、高位の河岸段丘であるⅠ・Ⅱ地区に比して、旧石器時代～縄文前期における人々の活動の痕跡は乏しい。またⅠ・Ⅱ地区では縄文中期をピークとして、以後は資料を減じるのに対して、平地のⅢ地区では逆に後期に資料が増加している。そしてⅠ・Ⅱ地区の縄文遺跡が大規模集中型であるのに対して、Ⅲ地区の縄文遺跡は扇状地における小規模分散型の在り方をとったらしいことを指摘しておきたい。

弥生・古墳時代の資料は、Ⅰ・Ⅱ地区にはほとんど散布しなかったものであり、稻作の開始が集落立地に与えた影響の大きさを示している。Ⅲ地区北部は扇状地伏流水の湧水地帯であり、これより下位の地域が初期稻作の適地であったであろう。他方これらの地域は扇状地に比して居住条件は悪く、洪水の危険性も高い。集落がデルタ内に半島状に突出する扇状地微高地上に立地することは、これらの理由にもとづくのである。当地の稻作地帯としての開発は弥生中期初め頃に遡るが、発展期は月影式期を中心とする弥生時代後期末である。当地域では平野部に立山町浦田の稚兒塚古墳や同塚越の塚越古墳という大型円墳を営むが、造墓と集落の盛衰の関係を把握することが今後の課題となろう。

古代の資料は、Ⅲ地区北部に多いが、広大な扇状地にも再開発が及びつつあったことを示している。そして重要なことは、Ⅲ地区北部の遺跡が古墳時代から連続するものではないことである。6・7世紀に当地が全く利用されなかったとは言えないが、集落は著しく衰退していくであろう。そして採集資料をみると、8世紀前半に属するものはごく少なく、8世紀後半以後に増加して9世紀にピークをむかえる。そして、立山町浦田には初期莊園として著名な東大寺領大蔵莊が存在する可能性が高いことをみるならば、古代における当地の再開発は国家的な政策にもとづいて進行したと考える。そしてその開発の対象は、何らかの理由、おそらくは河川の氾濫によって荒廃した稻作適地を中心であり、かつそれまではあまり利用しなかった扇状地にも及びつつあったことが判る。

中世の遺物の散布状態は、広く分散的であるが、人々の活動が衰退したとは考えにくい。現在、富山県には扇状地を中心として散居村が残っていることが知られているが、当地の中世の景観はこれと似たものではなかろうか。デルタにおいては必然的に微高地に集住する傾向が生じるが、扇状地においては水利の問題を解決するならば小規模分散型の開発も可能なのである。このような様相の形成期は、10世紀以後と推察する。そしてそれは初期莊園の衰退期と一致する。

近世の遺物は中世の在り方をひきつづつ、著しく増加、多様化している。特に近世中頃以後になると、在地の越中瀬戸窯の製品が普及する反面、北九州や京都系の施釉陶磁器も少なからずもたらされるようになった。この反面、長い間、食器の中で重要な役割を果たしてきた土師器は著しく減少し、型押土製品の生産に転換しつつあった。近世後期には近代の食器とさほど変わらない様相が出現したが、それは食器の分野にとどまらない現象であったと考える。（宇野隆夫）

第3章 おわりに

1987年度の分布調査によって、2906片・口縁部29.8個体分の遺物を採集し、3個年の採集遺物は、9049片・173.2個体分に達した。また遺跡数も、従来38遺跡が知られていた地域において、新たに37遺跡を加え、75遺跡を設定した。分布調査の実施によって遺跡の知見は一新されることが判る。

本年度は、立山町の西北部に位置する扇状地末端地帯であるⅢ地区を中心として分布調査を実施した。調査前においては、堆積の著しい地域における分布調査の有効性について若干の疑念をもっていたが、結果は従来の8遺跡が27遺跡と急増することになった。現在では、削平を受けることが多い高地の遺跡は元来発見されやすいものであって、低地においてこそむしろ分布調査が必要であると判断している。また一定量の縄文時代遺物を採集できたことは、少なくともそれ以後においては、採集遺物の量が少ない時期と地区にも意味をもたせうことを示すと考える。そして本年度の調査によって平野部の様相を一定程度、知ることができ、高位の河岸段丘と氾濫原からなるⅠ・Ⅱ地区の所見と対比した結果、興味深い事実が明らかになってきた。その主要な点は前章に示したが、ここでは、もう少し広い視点に立って検討することにしよう。

旧石器～縄文時代前期の資料は、高位の河岸段丘に多い。また縄文時代前期には海岸の、安定した場所に遺跡が増加するが、Ⅲ地区のような平地には資料が乏しい。そして縄文時代中期には河岸段丘上の遺跡が最盛期をむかえ、海岸部とりわけ越中東部の遺跡も玉造りを通じて活況を呈するが、このような時期に、扇状地の利用も盛んになりつつあった。縄文時代中期は、北陸において縄文文化がとりわけ栄えた時期であるが、その理由の1つに自然環境をくまなく利用し得るようになってきたことをあげたい。当期の土器様式に東日本の影響が加わってくる背後に、渡辺誠氏の示す植物質食料の高度利用技術の伝播を想定したいのである。またⅠ・Ⅱ地区の縄文遺跡は泉拓良氏が東日本型（とくに中部・関東地方）とした台地に立地する集中型の集落に相当し、Ⅲ地区の縄文遺跡は近畿地方に多いとする扇状地に立地する小数安定型の集落にあたるものであろう。北陸にあっては、東・西日本の在り方を多様な自然環境の利用に生かし、独特の安定した北陸型生活を営んだと推察する。またこのことは北陸の硬玉製品が東・西日本に広く運ばれることも無関係ではなかったと推測したい。

縄文時代後・晩期には、Ⅰ・Ⅱ地区の遺跡が衰退し、扇状地の遺跡が増加する傾向にある。気候の寒冷化によって高地が住みにくくなつたとも考えうるが、降水量の減少が河川の流路を安定させたり、落葉樹林帯が扇状地に近づいて、その居住条件を向上させたという積極的な理

由が存在した可能性もある。

なお、縄文時代後・晩期に遺跡が低地に進出する傾向は全国的な動向であるが、その基盤は当地においては、縄文時代中期に形成されたと考える。そして縄文遺跡の低地への進出は、弥生時代が成立する条件にはなり得ても、縄文遺跡と弥生遺跡の立地が本質的に異なるものであることを知り得た。

すなわち弥生・古墳時代の遺跡は、デルタ地帯に突出する扇状地微高地に立地するのであって、扇端部湧水を利用した農業をおこなっていたと考える。それに対して縄文時代は、あくまで扇状地における植物質食料採集を基本とする社会であったろう。農耕村落が扇状地に本格的に進出するには、当地においては国家的な政策にもとづく開発が必要であった。

6・7世紀に衰退したⅢ地区に本格的な再開発が及ぶのは、8世紀も中頃以後であろう。当地に東大寺領大蔵莊が比定されること、再開発が中央権門の主導にもとづいて進行したことを見抜している。その最大の開発対象は荒廃した農業適地であるが、それまではほとんど利用されなかった扇状地や、Ⅱ1地区の峡谷氾濫原にも遺物が散布するようになった。また須恵器生産地である上末窯もこの頃操業を開始する。これらの様相は、それまでの在り方を一変させるものであった。ただ小規模ではあるが再開発の端緒は8世紀前半にあるらしいことにも注意したい。

このような動きは、9世紀をピークとして、変質していく。弥生時代から古代前期にあっては、中核的な集落を中心として、他の小規模集落も存立していたが、この頃から散居村的な景観になってきたと推測する。そして初期莊園は衰退期に入り、遺跡も見えにくくなるが、これは開発が挫折したのではなく、それまでとは異なる小規模分散型の開発に転換したものと想像したい。この開発によって環境をさらにきめ細かく利用することが出来るようになった。そしてその在り方を基本として、発展して中・近世の様相に至ったのであろう。

なお、10世紀以後における小規模分散型開発への転換は当地だけの現象ではなく、日本に広く生じたものと考えている。そして他のかなりの地域にあっては中世に再び集村化するが、この動きが顕著に生じなかった地に散居村が残ったものと推測したい。

立山町は、多彩な自然環境に恵まれてることと立山信仰を除くならば、これといった特色をもつ地域ではない。しかしそれ故に、当地の歴史は、人びとがどのように環境と取り組み、現代の社会を築いてきたかを集中的に教えてくれるものと考える。 (宇野隆夫・森秀典)

参考文献

- 1 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会「珠洲法住寺第3号窯」石川県古窯跡第2年次調査報告、1977年。
- 2 石川県立埋蔵文化財センター「漆町遺跡」1986年。
- 3 石川考古学研究会『シンポジウム「月影式」土器について』1986年。
- 4 金沢市教育委員会「新保本町チカモリ遺跡 第4次発掘調査兼土器編」1986年。
- 5 小島俊彰「北陸の縄文時代中期の福原—戦後の研究史と現状—」『大境』第5号、1974年。
- 6 小島俊彰「井口式土器」「縄文文化の研究」4縄文土器Ⅱ、1981年。
- 7 白菊古文化研究所「乗鞍第1号窯址」1969年。
- 8 高堀勝喜「縄文文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学』Ⅱ縄文時代、1965年。
- 9 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1977年。
- 10 立山町教育委員会『立山町史』下巻・別巻、1984年。
- 11 立山町教育委員会・立山町文化財保護調査委員会「立山町利田横枕遺跡予備調査報告書」「立山の文化」22号、1971年。
- 12 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅰ、立山町文化財調査報告第1冊、1986年。
- 13 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅱ、立山町文化財調査報告書第2冊、1987年。
- 14 富山県「富山県史」考古編、1972年。
- 15 富山県教育委員会「井ノ口遺跡」1980年。
- 16 富山県教育委員会「昭和53年度 富山県埋蔵文化財調査一覧」1979年。
- 17 富山県教育委員会「昭和56年度 富山県埋蔵文化財調査一覧」1982年。
- 18 富山県教育委員会「昭和60年度 富山県埋蔵文化財調査一覧」1986年。
- 19 富山県教育委員会「昭和61年度 富山県埋蔵文化財調査一覧」1987年。
- 20 富山県教育委員会「富山県遺跡地図」1972年。
- 21 富山県教育委員会「富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概要」1978年。
- 22 日進町教育委員会「折戸80号窯発掘調査報告書」1978年。
- 23 能都町教育委員会「真脇遺跡」1986年。
- 24 野々市町教育委員会「御経塚遺跡」1983年。
- 25 橋本正「回転押型文土器の問題—富山県の場合—」『大境』第4号、1968年。
- 26 橋本正「回転押型文土器の基礎的研究」『大境』第5号、1974年。

- 27 藤田富士夫「富山県立山古窯跡群」『考古学ジャーナル』97, 1975年。
- 28 藤田富士夫「富山」日本の古代遺跡13, 1983年。
- 29 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』I, 1966年。
- 30 南久和「北陸の縄文時代中期の編年について」『北陸の縄文時代中期の編年他9編』1985年。
- 31 森秀典「北陸の縄文時代中期後業“串田新式”に関する編年試案」『大境』第8号, 1984年。
- 32 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号, 1985年。
- 33 吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3 日本中世, 1977年。
- 34 吉岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983年。
- 35 渡辺誠「増補縄文時代の植物食」考古学選書13, 1984年。
- 36 泉拓良「縄文時代のムラ」『縄文から弥生へ』1984年。
- 37 泉拓良「植物性食料」『季刊考古学』第21号, 1987年。

図版一
III地区航空写真(1)



(1986年撮影、縮尺1/20,000、第3回参照)



(1963年撮影、縮尺 1/20,000、第3回参照)

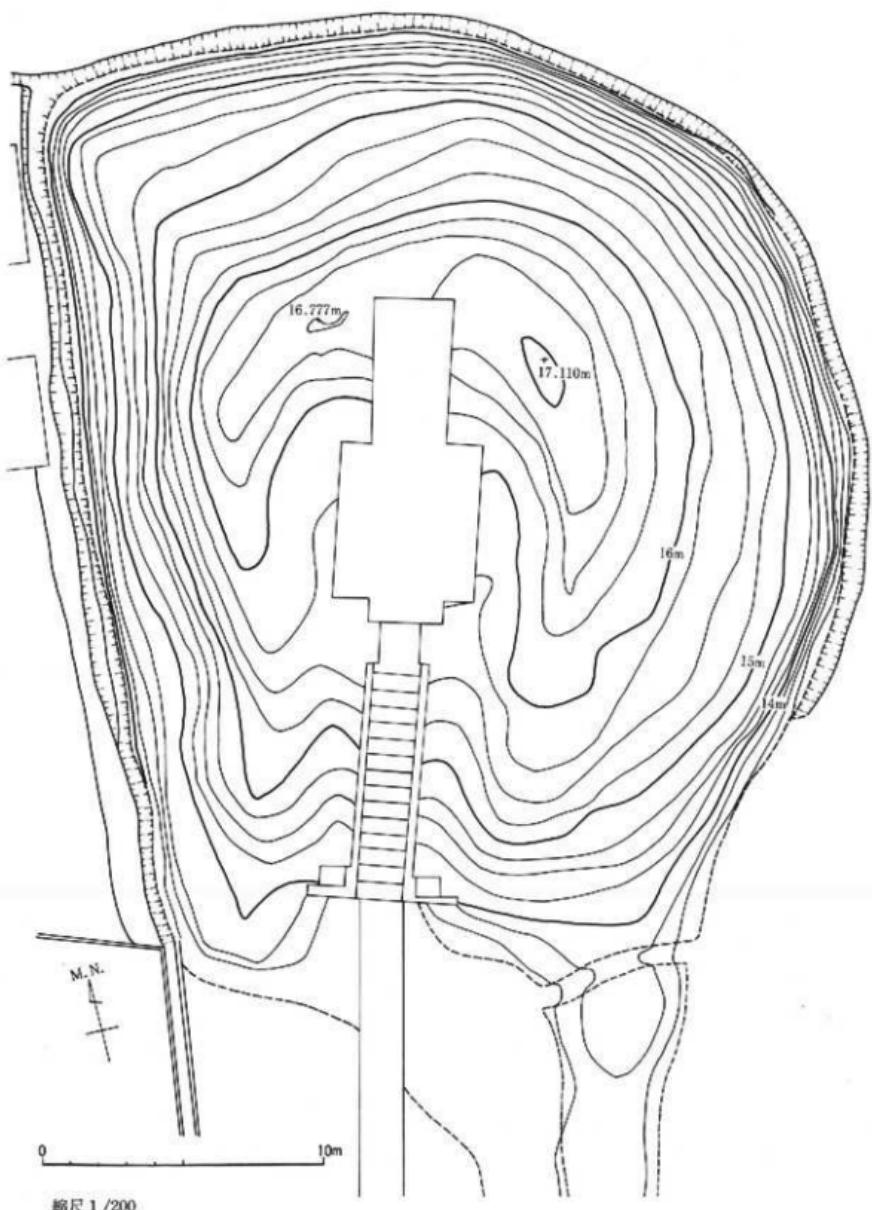


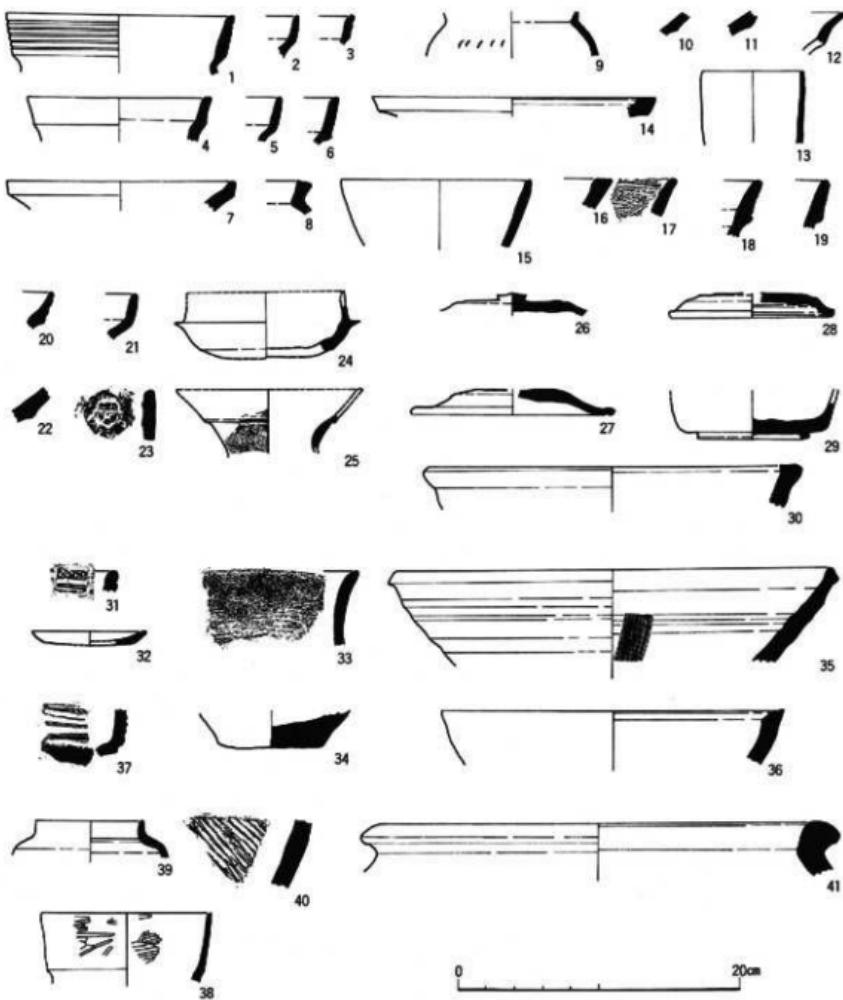
1 遠 景(西から)



2 近 景(南から)

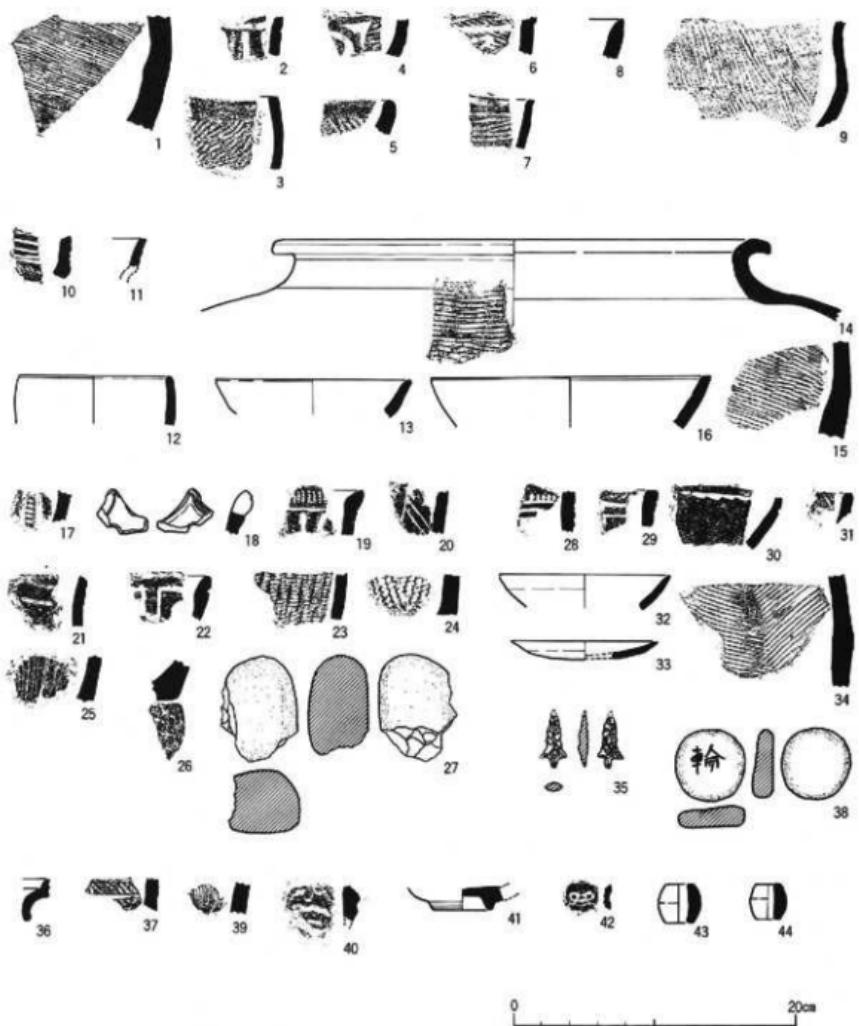
図版四 塚越古墳墳丘測量図



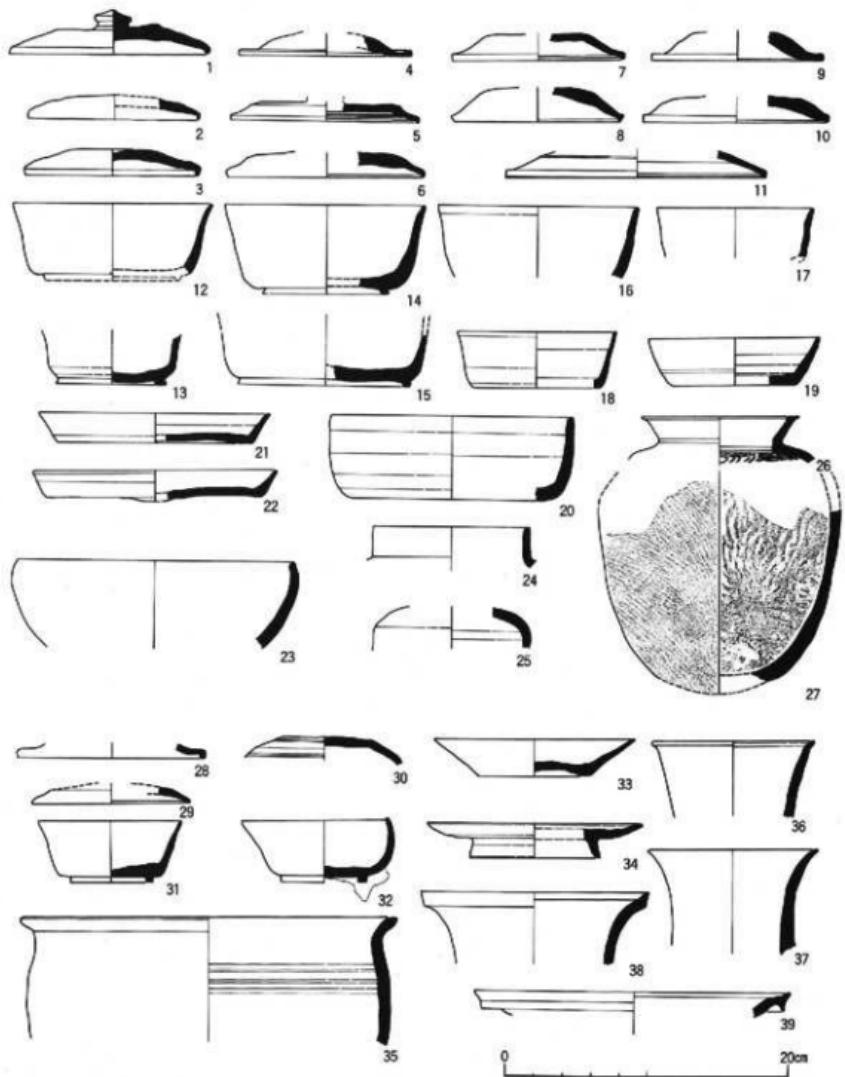


绳文土器、弥生土器、古墳～近世土師器、古墳～中世須恵器（1～17：塚越遺跡、18・19：塚越古墳
20～25：鉢ノ木遺跡、26～30：曾我遺跡、31・32：利田横枕遺跡、33～36：利田棚田遺跡、37：利
田高見遺跡、38～41：五郎丸遺跡、縮尺1/4。図版10参照）

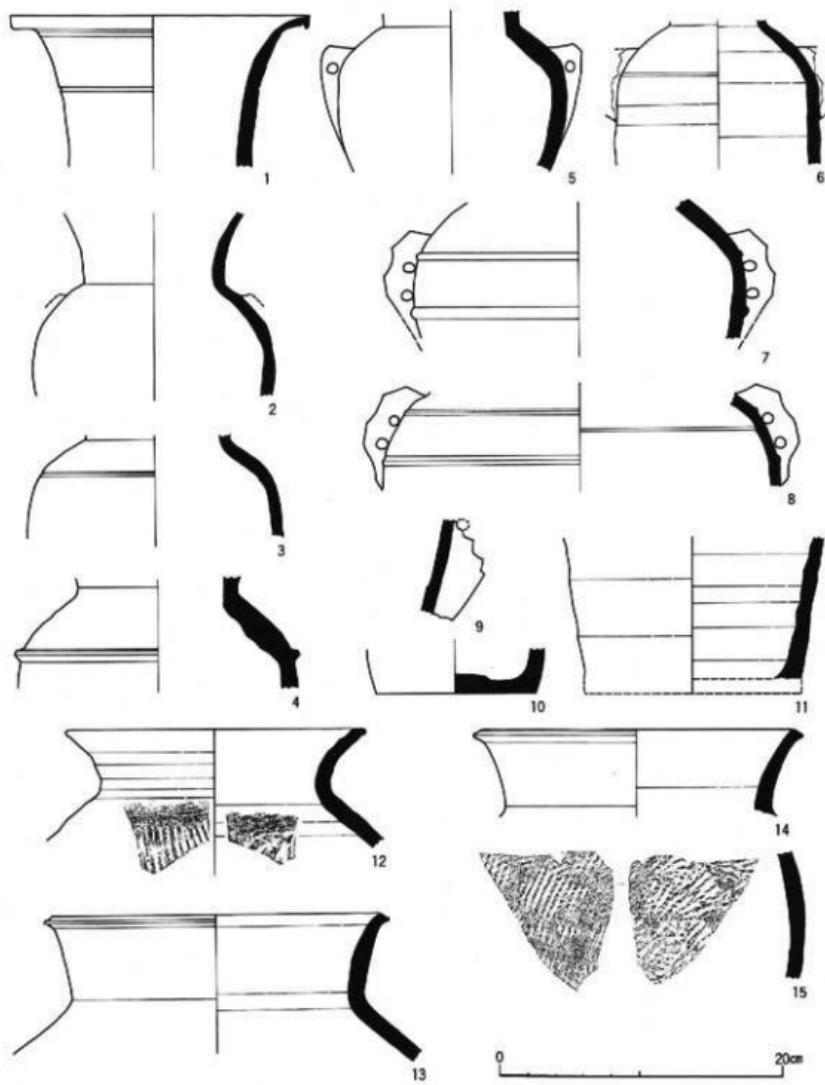
図版六 遺物実測図(2)



縄文土器・石器、弥生土器、古代～近世土師器、中世須恵器、一字一石経、近世陶器（1：横沢Ⅱ遺跡、2～12：横沢Ⅰ遺跡、13～16：日水遺跡、17～27：二ツ塚遺跡、28～35：二ツ塚畠田遺跡、36：浦田西反遺跡、37：日置遺跡、38：前田經塚、39：8口地区、40：9ニ地区、41：10小地区、42：14ル地区、43：16ニ地区、44：17口地区、縮尺1/4、図版11参照）

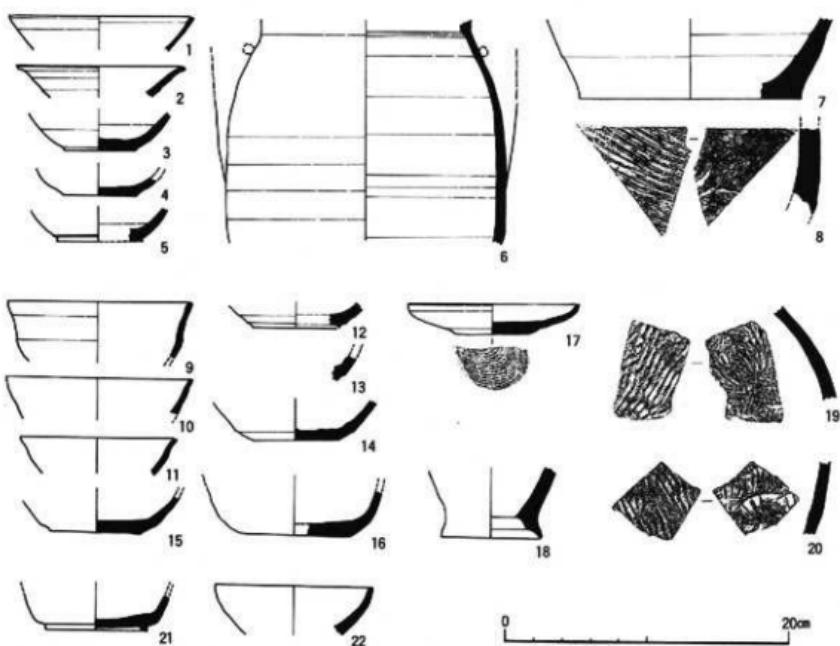


古代須恵器 (1~27: 釜谷2号窯, 28~39: 釜谷3号窯, 縮尺1/4, 図版12・13参照)

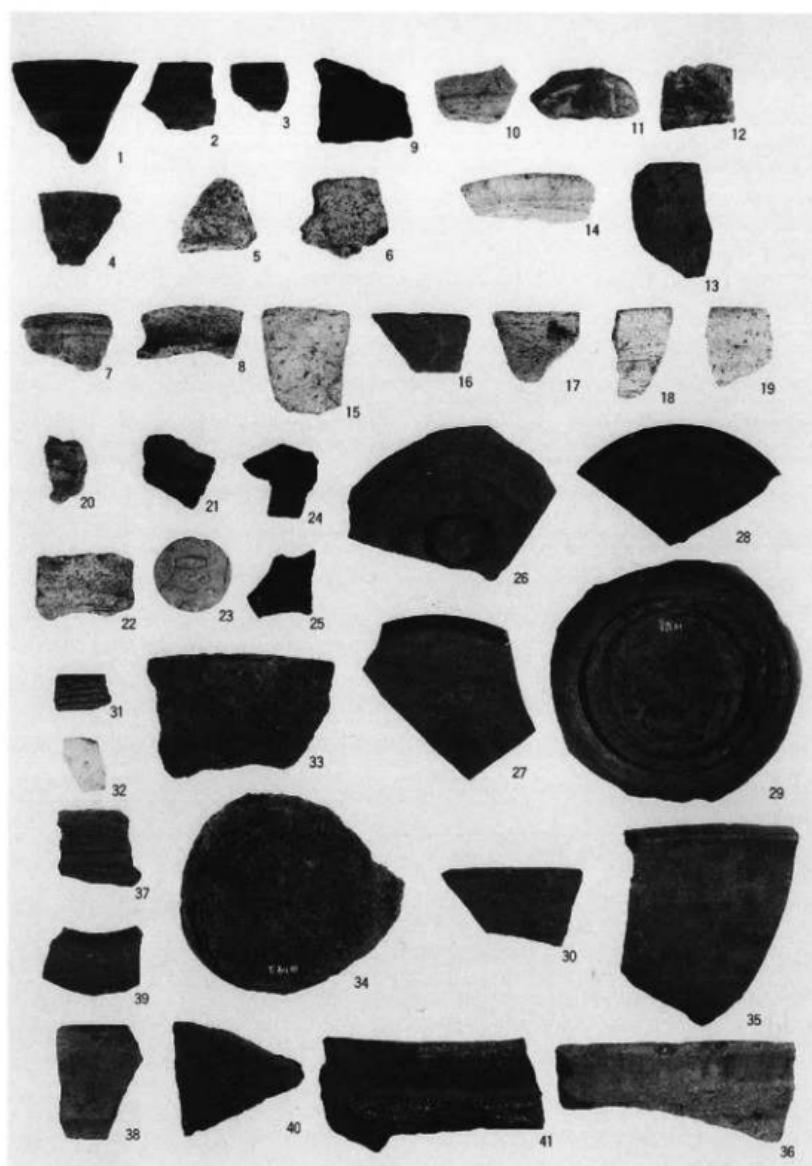


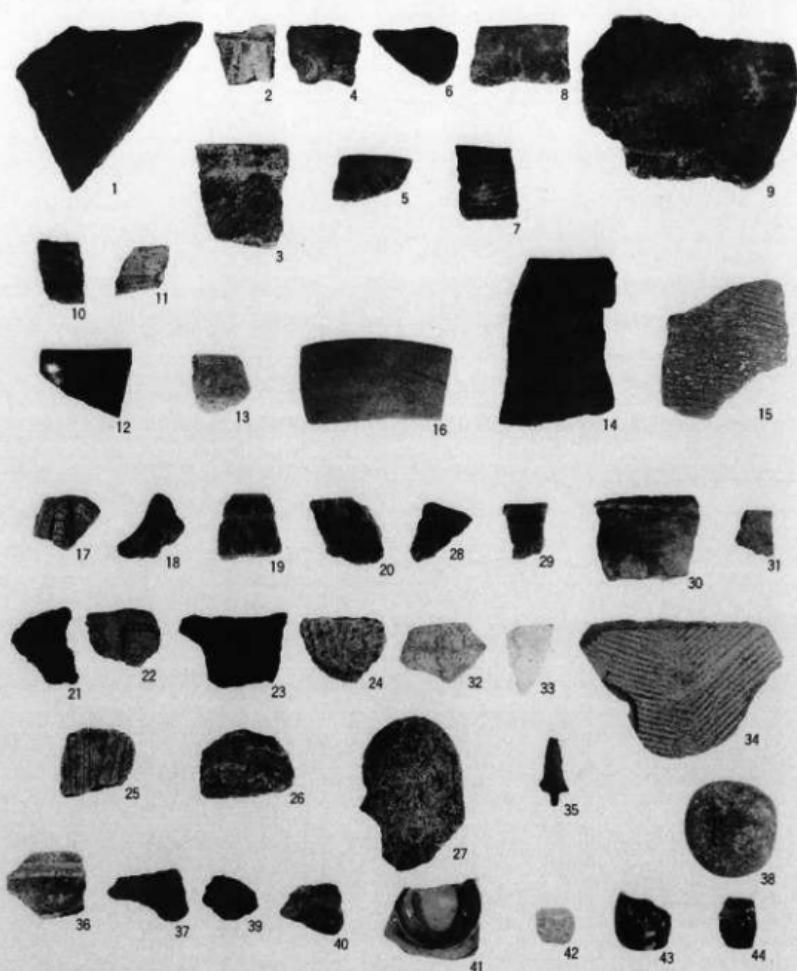
古代須恵器 (1~15: 笠谷3号窯, 横尺1/4, 図版13・14参照)

図版九 遺物実測図(5)

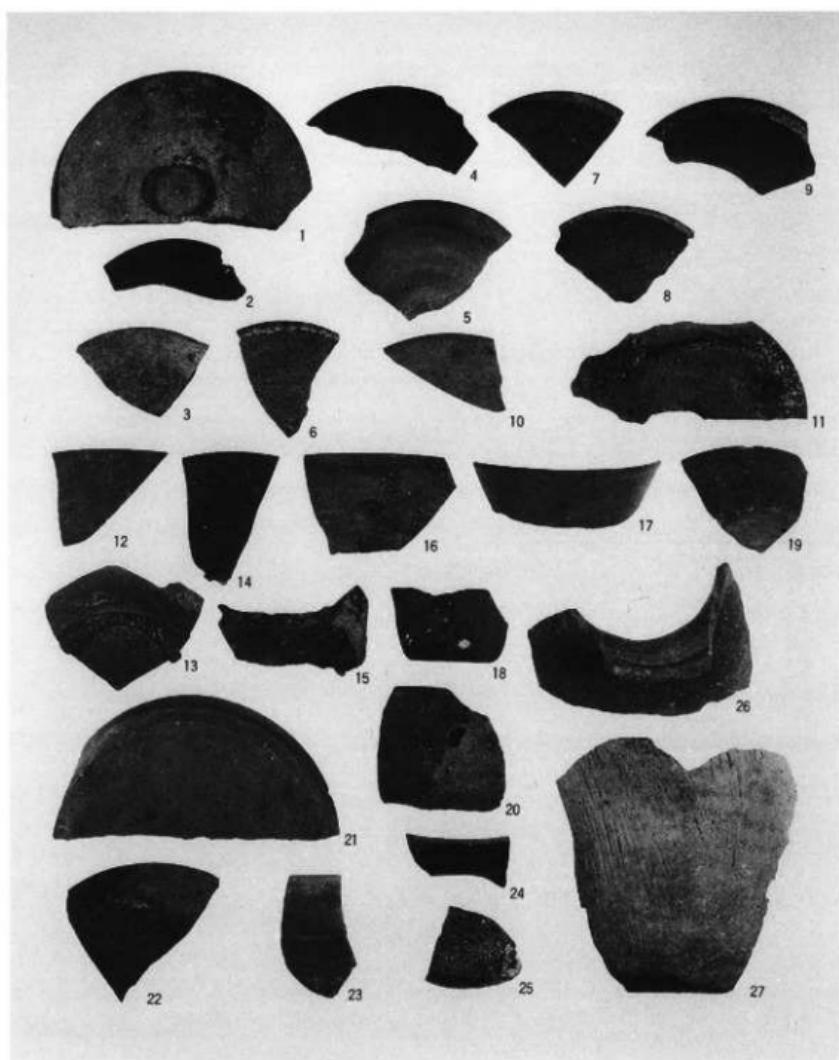


古代須恵器 (1~8: 法光寺谷3号窯, 9~20: 法光寺谷5号窯, 21・22: 25地区, 縮尺1/4,
図版14参照)

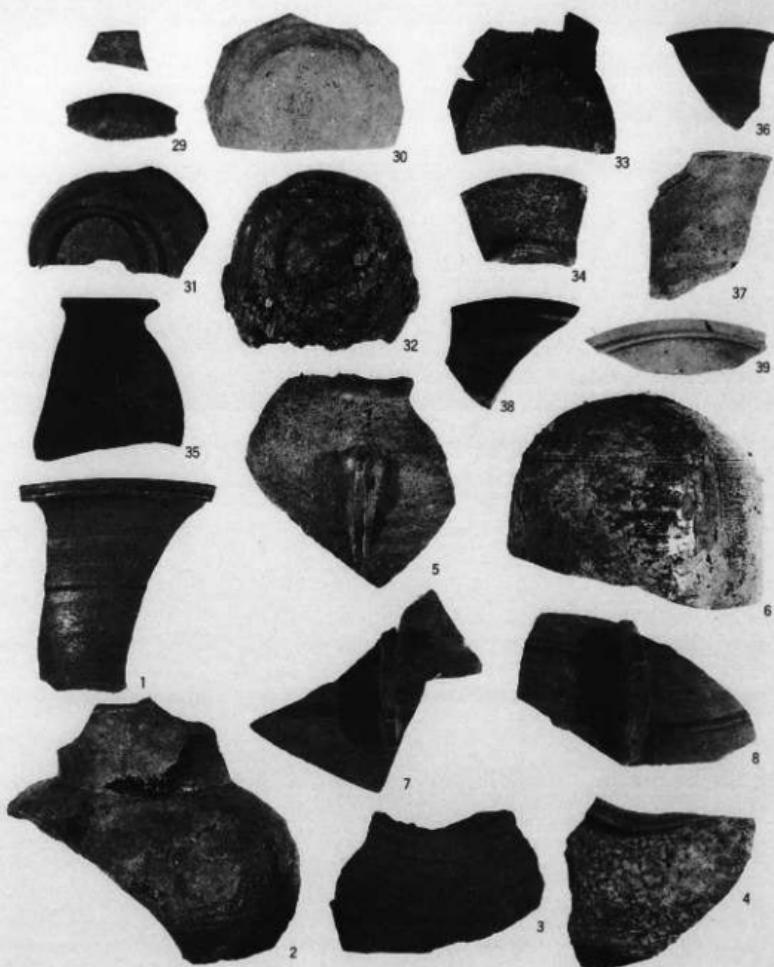




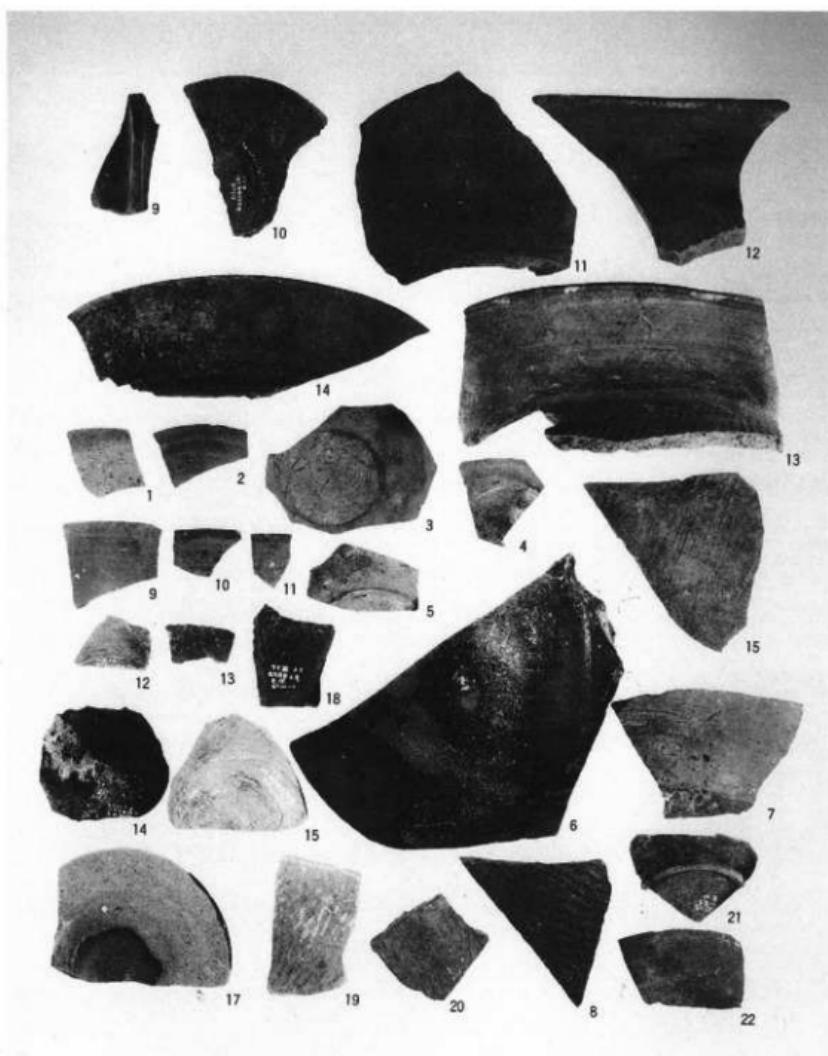
図版6 参照



図版7 参照



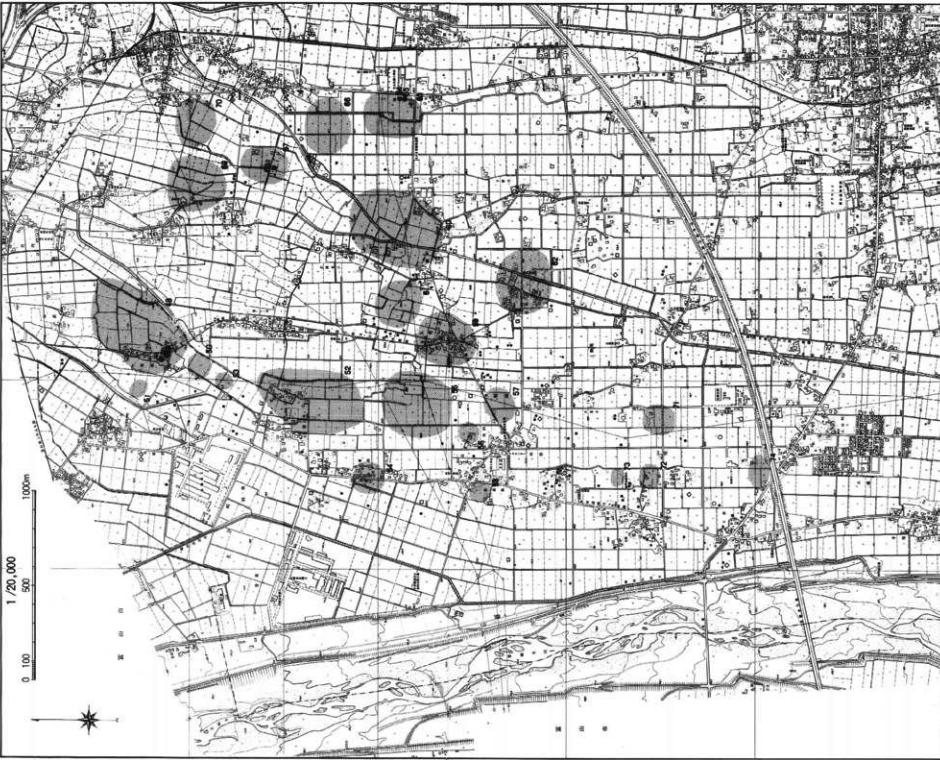
図版7・8 参照



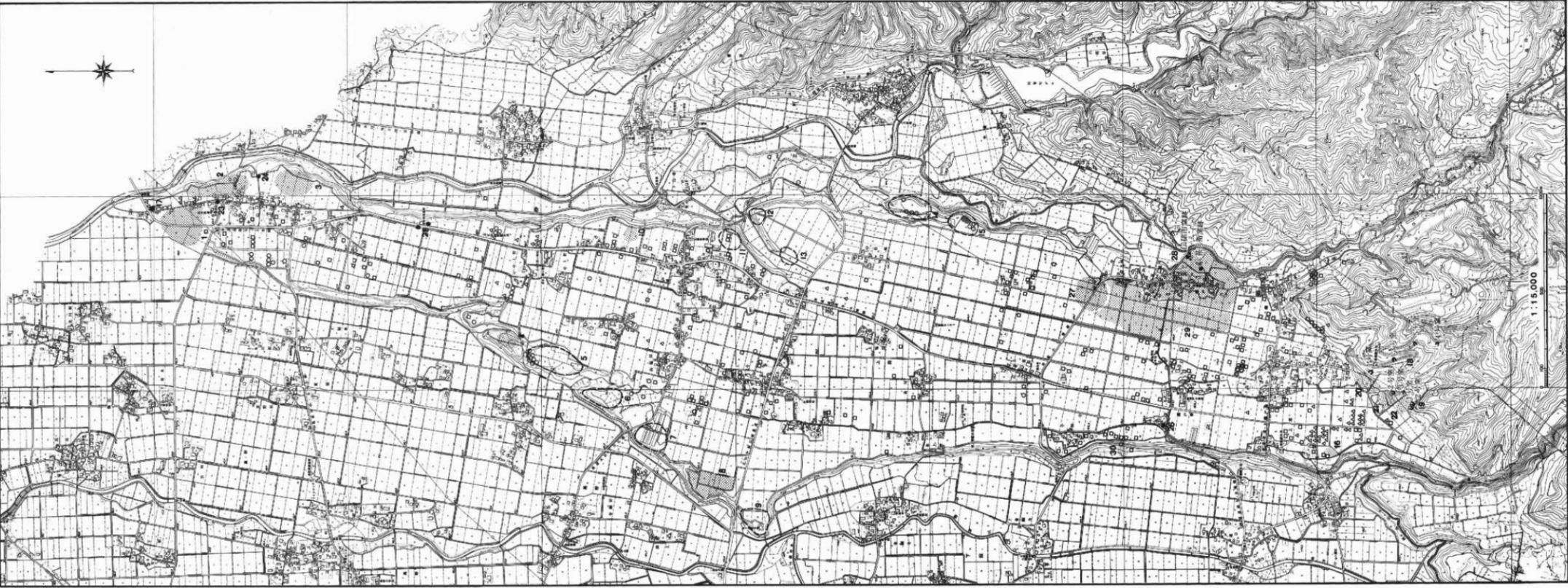
図版8・9参照

- 48 保越Ⅰ道跡(編文時代～近世)
49 保越古墳(古時代)
50 保越Ⅱ道跡(編文時代～近世)
51 保城Ⅲ道跡(編文時代～近世か)
52 鍾ノ木ノ道跡(編文時代～近世)
53 鍾ノ木ノ道跡(編文時代～近世)
54 岩我道跡(編文時代)
55 利田塙山道跡(編文時代～近世)
56 利田塙山道跡(古代～中世)
- 57 利田高見道跡(古代～中世)
58 線曲輪道跡(古代～近世)
59 五郎丸道跡(編文時代～古代～近世)
60 線沢Ⅰ道跡(編文時代～近世)
61 線沢Ⅱ道跡(編文時代～古代～近世)
62 日木道跡(編文時代～近世)
63 二ノ塙道跡(編文時代～古代～近世)
64・65 二ノ塙経塚(中世か)
66 二ノ塙畠道跡(編文時代～近世)
- 67 畠田石臼遺跡(編文時代～近世)
68 大塙冢(中世)
69 畠田高瀬し遺跡(古代～近世)
70 畠田反瀬跡(弥生時代～古代～近世)
71 上野ノ道跡(編文時代～古代～近世)
72 上野ノ道跡(中世～近世)
73 上野ノ道跡(中世～近世)
74 日置跡(編文時代～古代～近世)
75 前田塙塚(中世)

(○：編文時代遺物採集地点、△：岩我～古墳時代遺物採集地点、□：古代遺物採集地点、◇：中世遺物採集地点、●：近世遺物採集地点)



図版六 I 地区の遺跡と遺物採集地点



1988年3月25日 印刷

1988年3月31日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

立山町文化財調査報告書第5冊

編集 立山町教育委員会

発行 富山大学人文学部考古学研究室

印刷 ヨシダ印刷株式会社

